

感舊淚餘

軋

內閣文庫			
三 三 七 函		三 一 二 六 二	和 書
架	冊	號	類

419

內閣文庫			
五 八 函		三 一 二 六 二	和 書
架	冊	號	類

和書
三一二六二號

史

內閣文庫			
番號	和	31262	
冊數	2 (1)		
函號	158	419	



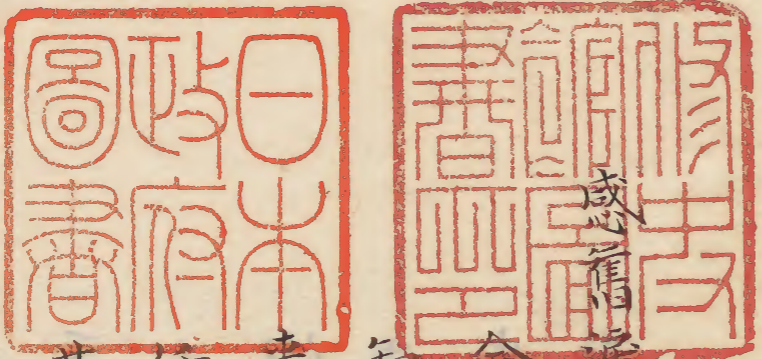
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





感福斎
余愚陋之質浮淺之学ヲ以テ先君特達ノ

知ヲ蒙リ腹心耳目ノ任ヲ辱フセシヨリ以

来今公ニ至リ漸々進用セラレ非分ノ重

任ヲ叨リニスルニ至レリ固ヨリ其器ニ非

サルト分明ニ自ラ知ルトイヘ氏義ノ重キ

處辞避スルヲ能ハス犬馬ノ力ヲ盡シ消埃

ノ報ヲ圖ラント日夜心ヲ苦ムルトイヘ氏

寸益ヲ效スルモナク剩サヘ量事ノ明ナク

揆時ノ智ナク知人ノ鑒ナキヲ以テ去年庚

...



成ノ夏六月不慮ノ罪戾ニ罹リ囹圄ニ逮セ
ラル、一九月ナリシカ今月五日ニ至リ
私室ニ歸リ罪ヲ待ツヘキノ旨命セラレ夫
ヨリ家ニ歸リテ一室ニ屏居シ無聊ノ餘往
事ヲ追思スレハ先君ノ恩眷ヲ蒙リシ時
ノ事一時ニ胸臆ニ攢リ當日ノ情状依稀恍
惚トメ目前ニアルカ如ク事トメ感ニ觸レ
サルハナク物トメ涙ヲ隕サ、ルハナシ夫
先君ノ盛德偉業ハ赫々トメ人ノ耳目ニ存
シ國家ト共ニ無窮ニ傳ルナレハ何ソ微臣

賛述ヲ待ンヤ雖然臣子ノ君父ヲ慕フノ情
ニ至リテハ苟モ手澤ノ存スル所ハ玩好器
用ノ微ニ至ルマテ猶護持シテ失ハサラン
トヲ願フ況ヤ余輩幸ヒニ先君ニ親近ス
ルヲ得ルト數年ニシテ嘉言ヲ側聞シ善行
ヲ仰見シト少ナカラス固ヨリ淺短ノ識ニ
テ其蘊奧ヲ測ルト能ハス所謂管ヲ以テ
天ヲ窺フノ類ナレハ見得タル處實ニ豹ノ
一斑ニテアルヘケレ氏苟モ見聞スルトコ
ロアルヲ其儘ニシテ傳ヘサランモ微衷ノ

安ンセサル處ナレハ恐ヲ顧ニスシテ拙キ
筆ニ任セ思ヒ出ルノ一二ヲ記ス元是感
舊ノ涙ヲ洒キタル餘ニ出テ公然ト人ニ示
スヘキモノニ非サレハ編述體裁ヲ成サス
文辞修飾ヲ加ヘス覽者はヲ諒セヨ

嘉永四年辛亥二月廿五日起草ス

野寄平八教景謹識

*先君義源公諱ハ頼永字ハ君成御幼名弥作君
ト稱シ奉ル世子ニテ任官シ玉ヒテ上總介ト
稱セラレ襲封シテ筑後守ト稱シ玉フ春林
院殿玄蕃頭豊氏公ヨリ十世ノ主ニシテ大
良院殿玄蕃頭頼徳公第四ノ御子ナリ春林
卿法印頼則公ノ御子ナリ春林寺殿刑部
瑗林院殿中務太輔忠頼公其御子ナリ靈源院
頼元公是ナリ養子トシ玉フ昌林院殿中務太
庫君實ハ石野筑前守義藩ノ嗣キ給フ血胤
統ナルヲ以テ入テ我藩ヲ嗣キ給フ血胤*

先君義源公諱ハ頼永字ハ君成御幼名弥作君
ト稱シ奉ル世子ニテ任官シ玉ヒテ上總介ト
稱セラレ襲封シテ筑後守ト稱シ玉フ春林
院殿玄蕃頭豊氏公ヨリ十世ノ主ニシテ大
良院殿玄蕃頭頼徳公第四ノ御子ナリ春林
卿法印頼則公ノ御子ナリ春林寺殿刑部
瑗林院殿中務太輔忠頼公其御子ナリ靈源院
頼元公是ナリ養子トシ玉フ昌林院殿中務太
庫君實ハ石野筑前守義藩ノ嗣キ給フ血胤
統ナルヲ以テ入テ我藩ヲ嗣キ給フ血胤

院殿玄蕃頭則雅公是ナリ其御子大慈院殿
中務大輔賴隆公始則昌公其御子大慈院殿
中務大輔賴貴公其御子寛明院殿上總介頼
端公世子ニテ早世シ玉ノ嫡孫ヨツテ其御子
新太郎君ヲ大乗公ノ父君ナリ立テ玉ノ
是即テ君大良公ニテ公ノ榮次郎君皆早世
兄君千代丸君仙太郎君立テ玉ノ皆早世
シ玉ノヨツテ公ノ世子ニ立テ玉ノ皆早世
御母ハ田中氏江ノ人嘉右衛門某ノ女ニシ
方ト稱ス公襲封シ良公ノ側室タリ於綱之
ラレタリ今賄料七百石ヲ進セラレ松濤院殿
ト稱セラレ今現ニ二本榎郎中ニ住セラレル
文政五年壬午三月二十二日久留米二ノ九ノ
御殿ニテ降誕シ玉ヒ天保元年庚寅文政十三
改世子ニ立セ玉ヒ江戸芝三田ノ邸ニ移ラ

セ玉ノ五年甲午九月十五日始テ御登營大樹
家齊公文恭院殿ト号ス御拜謁同年十二月十六日
從四位下侍從ニ任セラレ十二年辛丑大良
公御帰國ノ年ナレ氏御疾アルニヨリテ御願
アリ御名代トノ公へ御帰國ノ御暇ヲ賜リ
始テ藩ニ就キ玉ヒ翼十三年壬寅ノ春東觀シ
玉ノ弘化元年甲辰天保十五年大良公薨玉
ヒ六月大樹家慶公ヨリ公へ襲封ヲ命セラ
ル二年乙巳夏入封シ玉ヒ翌三年丙午七月三
日疾ヲ以久留米城御本丸ノ御居間ニ薨シ玉

フ御年二十五ニナラセ玉フ御菩提^{喜カ}所久苗米
 城ノ西南京隈ナル江南山梅林寺ニ葬奉ル現
 在羅山和尚法号ヲ義源院殿前拾遺補闕筑
 州太守仁峯道崇大居士ト申奉ル公ノ夫人ハ
 興君ノ御養女實ハ齊興君ノ父君溪山齊宣君
 ノ御女ナリ御名晴姫君ト申奉ル天保八年丁
 酉四月二十ハ日三田郎ニ御入與御誓姻アリ
 公ノ御逝去江戸ハ聞ケル時御年二十七ニ
 ルテ直ニ薙髮シ玉ト晴雲院殿ト称シ奉
 一 公天性御聰明ニアラセラレ殊ニ御幼少ヨリ
 御孝心深クアラセ玉フ九歳ニテ江戸邸ニ出
 サセ給ヒテヨリ大良公ニ事ヘ玉フ一少モ

懈リ玉ハス聊モ御心ニ違ヒ玉フ一アラセラ
 レス追々長セラレテ後ハ日々ノ御定省ノミ
 ナラス終日或ハ夜分迄モ御側ニ侍リ玉ヒ萬
 事委曲周詳ニ近臣ト打交リ玉ヒテ使令供給
 ヲモ勤メサセラレシ一モアリシニ毫モ倦怠
 ノ意アラセラレサリシトナリニ義敬謹テ考
 一ノ頃迄ハ日々ノ御定省ノ御兄弟御女様方
 一ノ同朝六ツ半時ニ良公ノ御目覚ニテ御機
 ヲ伺セラレシ計ニ歳ノ頃ヨリ朝ノ御定省相
 一ノ無リシカレ御又四歳ノ頃ヨリ朝ノ御定省
 一ノシテ其後愈々御兄弟方ト御定省相
 一ノヨリ朝モ御兄弟方ト御定省相
 一ノ計リ朝モ御兄弟方ト御定省相
 一ノ公計リ朝モ御兄弟方ト御定省相

公へ仕へ玉フ一如此ニ付幕府ノ典例本藩ノ
故事親シク良公ヨリ習ヒ皆深ク熟シ玉フ
トナリ凡ソ公ノ賢タル天質ノ美ト學問ノ
功多ニ居ルト雖トモ良公へ仕へ玉ヒ子道
ヲ盡シ勤勞艱難心ヲ苦メ性ヲ忍ヒテ玉
成シ給フニヨル一又少ナカラストナリ
一公平生ノ御見識ニ大名ノ職分ハ天下ノ藩屏
ナレハ國政ヲ修メ武備ヲ固フシテ 將軍家
ノ指揮ヲ奉シ 皇室ノ守護タル一ヲ
寸刻モ忘ルヘカラス隔年ニ參勤交代シ朔望
ノ登城等ヲノミ勤向ト心得ルハ甚誤レリト
常ニ仰ラレシナリ
一公素ヨリ文武ノ業ヲ好玉フ御學問御幼少ノ

時ハ儒臣安元八郎真凱樺島小助孝継本莊一
郎一謙高田久太郎正通等交ル交ル伴読ス又
大良公ヨリ林大學頭述齊先生快ヲ御賴ニア
リテ月々入来アリテ講義セラレ祭酒大學頭
老セラレテ後ハ其學頭タル佐藤捨藏坦一齊
後擢ラレテ昌平ヲ招キ玉ヒシナリ御十六七
歳ノ頃ヨリ儒臣岡永嘉右衛門鼎伴讀ス即テ
佐藤翁ノ門人ニテ殊ニ 公ノ知遇ヲ蒙レ
リ 公ノ道ニ進給フ一其力居多ナリ其後余
及ヒ佐田修平直道モ引續キ伴讀セシナリ武

藝モ兼テ学ヒ玉フ馬術ハ人見流ニテ是ハ
大良公素ヨリ其妙ヲ得玉ヒ細川長門公是ハ
公ノ弟君ニテ臺作頼美君ト称セラレ後ニ常
州矢田部ノ領主細川長門守興徳ノ養子トナ
ラセ玉ヒ喜重郎君ト改メラレ後ニ又襲ニモ
封シ玉ヒテ長門守興建君ト称セラレ
亦其術ノ妙ニ通セラレケレハ公ニモ御幼
少ヨリ父君叔父君ノ教ヲ受ケ給ヒ家臣ニ
城六郎同九十九梶村鬼一左衛門馬場織八等
モ其技ヲ申シ上ケ弓術ハ尾州竹林派ニテ家
臣藤田忠兵衛申上ル劍術ハ浅山一傳流ヲ学
ヒ玉ヒ江戸ノ郎ニテハ津田武太夫其子恒次

次郎久留米ニテハ津田傳其子磯之丞後一左
改申上ル鎗術ハ宝藏院磯野派ニテ近臣ノ中
伊吹伴次郎細見勝左衛門等申上ル右ノ如ク
衆藝兼学ヒ玉フ中ニモ馬術劍術ハ殊ニ好ニ
至ヒテ其技モ勝レテ妙ニ入ラセ玉ヒ家臣ノ
内其技ニ長ム者トイヘ氏或ハ其下ニ出ルト
イヘリ書ハ御幼少ノ時嵯峨様ヲ学ヒ玉ヒ御
旗本伊藤且水^子ニ学ヒ玉ヒ後又近衛流ニ改メ
玉ヒ御旗本小堀大膳ヲ師トシ主ノ御生長ノ
後ハ趙子昂ノ風ヲ学ヒ給ヒシ事モアリシ

一大良公殊ニ猿樂ヲ好マセラレ御身ニモ其業
ヲ学ヒ玉ヒテ絶妙ニ至ラセ玉ヘリ夫故ニ
公ニモ御幼少ヨリ猿樂ヲ学ヒ玉フヘキヨシ
命アリテ其課程甚ク嚴シカリケレ凡少モ厭
ヒ玉ハス毎々此技ハ固ヨリ賤技曲藝ナレ凡
予カ身ニ取リテハ父君ノ歡ヲ承ルノ具ナレ
ハ急ルヘカラストノ御心ニテ室生弥五郎日
吉平兵衛命尾哉右衛門等ヲ召テ其技ヲ受ケ
玉ヒ家臣ニテハ松木清之進同姓卯三郎モ其
技ヲ申上頗ル奥妙ニ入ラセラレ秘訣ヲ受ケ

玉ヒシナリ
一 近代文人武夫ニ一種ノ弊風アリテ文学ヲ好
ム者ハ僅ニ經史ヲ涉獵シ文詩ノ一端ヲ覺ユ
レハ忽チ傲慢ニナリテ人ヲ侮リ平常ノ言語
ニモ漢語ヲ用ヒ衣服狀貌マテモ異風ヲ好ム
ニ至リ又武夫ニハ少シク人ニ過ルノ藝アレ
ハ是ヲ恃ミテ粗厲暴悍ニ陥リ諸事荒々シク
人ヲ輕ンシ自ラ高ルノ弊ナキニシモアラス
大良公深ク右等ノ弊ヲ嫉ミ給ヨリシテ公
ノ文武ノ業ヲ修メ玉フテ或ハ其弊ニ陥リ玉

ハンカト慮ラセラル、ノ御慈心深クアラセ
ラレ事々物々ニ其警戒絶ヘサリシカハ公
モ其意ヲ厚ク奉シ玉ヒ紆餘曲折シテ其間千
辛万苦人ノ堪ヘサルヲ堪ヘ玉ヒ父君ノ歡
ヲ失ハスシテ文武ノ骨髓ヲ学ヒ得玉フ一天
資ノ絶倫ニアラセラル、トハ雖モ其御立志
ノ堅キ御用心ノ厚キ知ル者^窃ニ涙ヲ掩ハサ
ルハナカリケリ

一 君子之過也如日月之蝕焉過也人皆見之更也
人皆仰之ノ古語モアリテ人誰カ過チナカラ

ン唯能改ル寸ハ却テ進徳ノ地トナルナリ然
ルニ其過ヲ改ルハ古人モ難ンスル處トイ
ヘ氏公ニハ此ニ於テ一事ノ仰キ奉ル大キ
ナリ御十六七歳ノ頃近臣ノ中一人并ニ乘
馬ノ枝ヲ以テ寵ヲ承ル者公ノ青年ノ情ヲ
動カシ玉フ時ヲ窺ヒ游佚淫蕩ノ話ヲ陳シ御
心ヲ揺シ奉ラントセシトアリ公モ稍コレ
ニ傾キ玉ハンカト見ヘサセ玉ヒ保傳ノ臣等
窃ニ憂慮セシ處大良公ノ英断ニテ其人々
皆左右ヲ遠サケラレ公ニモ深ク警省玉ヒ

幡然トノ改ノ玉ヲ此御過テニ痛ク懲リサセ
玉ヒテヨリ終身右等ノ事ニハ御心ヲ毫末モ
移シ玉ハサリシ一人皆感服セサルハナシ
公前日ノ御微過ハ即チ後來御進徳ノ基トナ
ラセ玉ヒタリト有志ノ徒ハ窮ニ稱シ奉レリ
義敬謹紫ルニ此事天保八年良公御參府ノ上
國御留守中ノ事ナリ翌年遠サケラレシナリ
御英断ニテ二人ノ御讀ヲ申上ケル力偶
其後御貞觀政要ヲ御讀シテ申上ケル力偶
平來テ御讀書及ヒシ御讀シテ申上ケル力偶
然昨酉年ノ事ニ申上シハ予レ貞觀政要ヲ讀
ヲシタ余ニ仰ラレシハ予レ貞觀政要ヲ讀
チ心ヲ止メサレハ多クハ空過テ省スル
モ無カリシメカ今佐平予カ去年ノ過ヲ奉ケレ

ハ頗ル内省ノ心ヲ起シテ其功貞觀政要ヲ讀
ヨリ切ナリ書ヲ讀ニ此心ヲ常ニ存シテ讀
シト仰ラレシナリ是レ
公德ノ一端ヲ伺ヘキナリ
一 公御十八歳ニナラセ玉フ時天保十年近臣ノ
中ニ不忠ノ者アリテ不慮ニ大良公ト御父
子ノ間ニ於テ微ニ嫌隙ヲ生セラレタルア

リ此時公ノ御痛心ニ至リテハ實ニ言語筆
端ノ能ク盡ストコロニ非ストナン其事實ニ
至リテハ二三機密ノ臣ノ外知ル者アルナ
シ此際ニ當リテハ國老有馬織部照長有馬播
磨泰賢參政岡田彈右工門正明水野又藏正芳

等ガカヲ盡シテ周旋調護シ奉レルニ頼リ危
疑氷釋シテ後ハ御父子ノ歎ハ誠ニ以前ニ倍
セラレ大良公ノ御慈愛公ノ御孝順聞ク
人感服シ奉ラサルハナカリシナリ然ルニ
公ニハ此艱厄ヲ經サセ給ヒテヨリ求道ノ御
志益堅確ニナラセラレ御一生御得カノ處ハ
コノ時ニアリシトソ近臣今井榮義敬原平太
夫止陽石野陸三郎好禎及ヒ前ニ出セシ儒臣
岡永嘉右工門鼎等皆竊ニ忠規ヲ盡シ奉リ愈
親近ヲ蒙リシトモ亦此時ヨリトソ聞ヘシ此

頃ノ御詩作ニ偶成トイヘル御題ニテ
横戈可奪三軍師難犯匹夫貞止志鬱々勁松
見歲寒請看誠實充天地
此御詩作ニテ其御志ノ程想像シ奉ルヘキナ
リ
一公ノ世子ニテアラセラレシ時ハ固リ子道ヲ
守ラセラレ聊モ政道ニ言ヲ發シ玉ハサリシ
カトモ或時從容トメ生田善八郎平佐佐平ト
善八郎ハ御用人ニテ參政シ佐平ハ中小性ニ
テ諸ノ御内用ヲ勤メ二人共ニ大良公ノ寵
リ臣ナ理財ノ道ヲ論シラレシトアリシニ二人

ノ説ニテハ當今ノ世ニ財用ヲ取扱フニハ正
理ニノミ拘リテハ行ハレカタクシテ日用ニ
差支モ出来ルモノユヘ推謀實^術數ニテ運用セ
サレハ時務ニ達セヌ者ナリト申上ケルニ
公仰セラレケルハ予カ見ニテハ左ハ思ハス
日用ニ差支ル程ノ困窮ニ及ヒタラハ愈以テ
推謀ニテハ行ハレ難シ唯能ク大信ヲ敷テ人
ヲ欺カス下ヲ虐セス所謂節用愛人ノ政ヲ行
テコソ救フヘキ道ナラント仰セラレケル是
一時御議論ニ出ルノ端緒ナレハ他日臨國シ

一 玉ヒテノ事業即チ此時ニ胎胚スト思ヒ出レ
ハ殊ニ難有クモ又尊ワトクコソ覺ユル
一 公未タ少年ニテ在ラセレシ時己亥艱厄近臣
今井榮ニ汝ハ文武諸藝ノ内ニテ最モ何事ヲ
好ムヤト御尋アリケレハ榮對テ臣諸藝ノ内
ニ於テ尤馳馬試劍ノニツヲ好ニ申スヨシ申
上ケレハ公仰セラレケルハ予モ汝ト同シ
ク右ノ二藝ヲ好メリ然レハ熟々思フニ人ト
ノ讀書學問セサレハ貴賤上下共ニ事業ニ成
リカタシ故ニ此道ニ於テハ綴ヒ好マストテ

モ勉強シテ学ヒ不可急モノナリト仰セラレ
シカハ榮モ深ク此辞ニ感發シタルトテ其後
モ毎々余ニモ語りシ然レバ榮モ深ク
一 公御性質温和ニテ喜愠ノ色ニ見レ玉ナリ鮮
クアラセラレ艱厄ヲ經サセラレテ後ハ殊ニ
諫ヲ求メ玉ヒ愈温顔ニテ言ヲ受テ謝セラレ
榮平大夫陸三郎等皆直諫ノ士ナリ故感
激ノ餘リ細事ニテモ心付タルトハ激烈ニ争
論セシニ皆流ルカ如ク容レ玉フ若或ハ旬
日ヲ經テ陳スルトナキ寸ハ近日ハ何故諫メ

サルヤ何卒切々論シクレヨナト宣ヒシト度
度ナリシトソ
一 公学ヲ好シ玉フトイハ氏前ニ陳シタル如ク
日夜大良公ニ侍セラレ顔ヲ受ケ意ニ先シ
セラルト多クシテ読書講業ノ暇ヲ得タマ
フト甚タ難カリシ去レ氏會讀月ニ六度是儒臣ハ
及ヒ近臣モ殘是儒臣ノ内代ル代ル
ラス出ルナリ講義六度勤ムルナリ林祭酒及
ヒ佐藤翁ノ講ハ内會六度是ハ儒臣ノ内一人
是外ニテアリシハ及ヒ近臣ノ讀書ニ
長セシ者兩右ノ課程ハ必ス怠セ玉ハス御公
三輩出ルル
務ト父君ノ御用ノ外ハ決シテ廢會シ玉ハス

其餘モ間隙ヲ得ラルレハ讀書ヲ事トシ玉ヒ
ケレハ保傳ノ臣ナトハ終日父君ノ御側ニ勤
勞シ玉フ上ニカク深更マテ讀書ニ精ヲ殫ク
シ玉ヒテハ或ハ御疾ヲモ生セラレンカト時
時御止メ申セシ輩モアリケルニ公敢テ其
意ヲ破リ玉ハスサラハ寢ニ就クヘシトテ奥
ニ入セ玉ヒテ後深更マテ讀書シ給ヒタルト
モ多シトナン武藝ノ課程モ大抵講釈會読等
ノ數ニ準シ勉強シ玉ヒ又父君ノ仰ニテ本朝
野史類ヲ岡永嘉右工門ヲシテ讀シメテ聞キ

玉ヒシトモアリシナリ
一 右ノ如ク讀書ノ暇ヲ得玉フト甚タ難クアラ
セラレケルニ一トセ大良公帰國シ玉ヒ
公獨リ東邸ニ在セラレシカハ此時ノ御勤學
ハ寔ニ格別ノ御事ニテアリシナリ其時ハ予
專ラニ伴讀シタリシニ前條ニノスル處ノ定
課會業ハ朝ヨリ午時ニ至リ晝ノ御膳ヲ召上
ラル、迄ニテ直ニ又予ヲ召サレ日々讀ミ玉
フ處ノ通鑑綱目ノ疑義ヲ質シ玉ヒ治乱興亡
切要ノ處ニ至リテハ種々御議論アラセラレ

且要語ヲ手抄シ玉ヒテ備忘録數卷ヲ成シ玉
ヘリ予モ亦狂妄ノ愚ニテ日用事務ニ引合セ
反復開陳セシニ傾聴シ玉ハストイフナク
或ハ日夜燭進ムニ及ヒテ後退出セシ一度々
ノ事ニテアリシ
一公深ク詩文ヲ好シ玉ヒケレ氏大良公ニハ
最モ詩客文人ノ浮靡奇僻ヲ惡シ玉ヒシカハ
公ノ御孝心ニテ敢テ公然トメ詩文ヲ學ヒ玉
ハス唯二三親近ノ臣下ト竊ニ唱和シ玉ヒ又
紀事題跋ノ類ヲモ作ラセ玉ヒ紀事ニツキテ

ハ議論ヲ作ラセラレシトモアリシナリ藤野
トイヘル老女是ハ大乗公ノ時ヨリ殊ニ歌
道ニ秀シカハコレニ學ヒ玉ヒテ和歌ヲモ詠
シ玉ヘリ
一公天質温良寛大ニアラセラレ臣下ニ過チア
リトイヘ氏疾言遽色ニテ叱シ玉ク一ナト至
テ少ク唯樂易ニテ在セラル夫レ故ニ平生昵
近ノ臣等或ハ恩ニ狎ル、モノアリ慈仁溫柔
ニ偏ニシテ君威薄クアラセラル、ヤト疑ハ
シキハカリノ御事モアラセラレシカト國老

以下ノ諸大臣ニ接シ玉フニ至リテハ温和ノ
中ニ自然ト威風備ハラセラレ人皆畏肅恭敬
セサルモノナク孰モ發強剛毅英特出群ノ主
ト仰キ奉レリ御德性ホト想ヒ奉ルヘシ
一 公温和ニテ近臣ヲ遇シ玉ヒ或ハ戲言戲動モアラ
セラレシカハ左右小臣等或ハ恩ニ抑ルニ
至ルモアリ是固リ臣子ノ罪ナレ氏備ヲ賢者
ニ責メ奉レハ公ニモ少シク戲言戲動ヲ節
セラレ更ニ慎重ヲ加ヘサセ玉ヒナハ益君德
ヲ進メ玉フヘシト予岡永嘉右工門ト相議リ

即テ此意ヲ以テ申上ケルニ公喜ヒ玉ヒテ
嘉納シ給ヘリ然ルニ又幾程ナク公近臣ト
遊戯シ玉ヒテ駭カシキトアリト聞ヘシカハ
予偏狭ノ性ニテ恐多モ竊ニ憂憤シ前度ノ蒞
言未タ君聽ヲ動ス一能ハサリシカト又々嘉
右衛門ト謀リ此度ハ鄙見ノ趣ヲ一冊ニ書シ
二人連署シテ上リシニ公殊ニ省悟シ玉ヒ
恐多モ吾過矣吾過矣ノ御辞ヲ蒙リタリ其頃
予近思録ヲ進講セシニ横渠先生ノ東銘ニ戲
言戲動ヲ戒タルアリシカハ猶又反覆シテ其

意ヲ陳セシニ御心ニヤ感シ玉ヒケン其東銘
ノ文ヲ親筆シテ扁額トナシ玉ヒ宮中ノ御書
齊夫入ト共ニアラセニ懸ケ置カレ常ニ自ラ
警メ玉ヘリ

一 少之時血氣未定戒之在色ノ聖語ニ違ハス青
年ノ時ニ方テ情慾ヲ制スルノ最難シトス然
ルニ公御十八歳ノ時ニカアリケン父君ヨ
リ仰セアリテ召仕ハルヘキ侍妾ヲ差置カル
ヘキ旨ナリ公固ク辞シ玉ヘ氏命ヲ得玉ハ
ス父君ヨリ諸有司ニ命セラレ四方ニ絶美ノ

婦人ヲ求メ宮中ニ納レシメラル然レ父公ニ
ハ予少年ノ身問安視膳ニテ已ニ一妻サヘア
ルニ更ニ美色ヲ近ケ娯樂スヘキノ時ニアラ
ストノ御心ニテ遂ニ近ケ玉ハサリシカハ臣
僚モ強ヒ奉ルノ能ハス其旨ヲ父君ヘ申上其
女ハ終ニ枕席ヲ奉スルノナク身ノ暇ヲ賜リ
テ出テニケリ只此一事便チ人ニ過キサセ玉
フノ數等ト申奉ヘシ
一 貴キモ賤シキモ朋ハ類ヲ以テ聚ルノ習ニテ
公已ニ登營シ給フ頃ヨリ追々長セララルニ

從ヒ當時有名ノ諸侯及ヒ世子ト交リ玉フ中
ニモ肥前國主松平肥前守齊正君土佐國主松
平土佐守豊熙君筑前支封秋月領主黒田甲斐
守長元君トハ道義ノ御交リ最モ深クアラセ
ラレ共ニ江戸ニ在セラル、年ハ各邸へ互ニ
數々往来シ玉ヒテ學術治道ノ御談論アラセ
ラレ或時詩酒ノ興ヲモ催サル各其國ニ歸ラ
セラル、トイヘ氏御書牘御往復ハ時月ノ間
ニモ數々ナリシトナリ又薩州ノ世子修理大
夫齊彬君辰子襲封薩摩トハ別シテ御交リ深

クアラセラレ諸事御謀議モアラセラレトソ
一公卿十四五歳ノ時ニマアリケン諸侯世子打
寄り玉ヒ武器ノ談ニ及ハセラレケルニ或ル
御方ノ當時ノ人ハ赤銅ノ鍔ヲ用ユルモノア
レ氏赤銅ハ質脆クシテ又ヲ受クヘキノ物ニ
アラス甚タ危キ事ナリト宣ヒケルニ公仰
セラレケルハ其ハ左ハ存セス真ノ武道ヲ知
ルモノハ鍔元マテ人ノ刃ヲ引受サル間ニ處
置ハ如何程モアルヘシ鍔ヲ恃ミテ敵ヲ禦キ
玉フ御心入コソ危ク存スルトアリケレハ肥

前侯其夙成英敏ヲ感シ玉ヒ夫ヨリ交ヲ結
セラレシト聞ヘシ

一天保十二年ノ頃當時賢諸侯モ多クアラセラ
ル、中ニ東國ニテハ水戸中納言齊昭卿西州
ニテハ松平肥前守齊正朝臣コノ両君コソ殊
ニ傑出シ玉ヒ其國中興ノ英主ナリト世上ノ
評判甚シカリケルナリ、公或時初窮ニ近臣有
志ノモノヘ仰セアリケルハ彼兩人實ニ世上
ノ評ニ違ス當今英雄ニテ予カ輩弱質ノ及フ
ヘキニアラス然リトイヘ氏志ノ願フトコロ

ハ此兩人ニハ止マラサル心得ナリトテ述懐
ノ御作アリ

賢主四方今在不東西唯聽常肥侯中興志銳
雖堪感所願何曾期此壽

其後肥前侯我邸へ入来シ玉ヒシトアリシニ
例毎賓客アルトキハ御机辺ノ書冊筆紙等ハ
近臣ヨリ預メ取片付ケ置クナナルニ如何シ
テ取残シタリケン右ノ御詩作御机上ニアリ
ケルヲ齊正君早クモ見出シ玉ヒ取テ朗誦シ
玉ヒテ是ハ絶唱ナリ願クハ賜ハラント宣ヒ

直チニ懷中シ給フ公夫ハ貴兄ニ示スヘキ
物ニ非ストテ取り返サント為シ玉ヒ兩君誓
ク争ヒ玉ヒシカ肥前侯深ク懷ニ藏メラレ終
ニ返シ玉ハス相共ニ一大笑シテ止ニ玉ヒキ
其交態ノ莫逆ニシテ磊落ナルト推知奉ルハ
キトナリ
一 水府公ニモ公ハ卿納交ノ卿志ナキニ非ス
トイヘ氏門閥モ異リ遽ニ交リ給フヘキニモ
アラス且父君ノ許シ玉ハス事ハ何事ニ於テ
モ獨断シ玉ハサレハ終ニ格別ノ卿交リハナ

カリシカ曾テ大良公ニ從ハセ玉ヒ一度小
石川ノ館ニ赴キ給ヒ齊昭卿へ接セラレシト
アリ其時卿ヨリ公ニ足下年少ニテ学ヲ好
ニ玉フヨシ伊達宗城伊豫守宇和島ノ世子ニ
後襲封シテ遠江守ト改メヨリ熟聞ス結構ノ
事ナリト宣ヒ又國政ハ兎角誠ニ非サレハ行
ハレヌ物ナリト御話アリシヨシ是ハ公曾
テ予ニモ御物語リアリシナリ
一 近古ノ明君水戸義公會津土津公備前芳烈公
肥後靈感公米澤元徳公後鷹山ト号セラレ等ノ遺事ヲ

聞セラレ景慕シ玉口中ニモ鷹山公ノ仁恕ニ
シテ勇強ナルヲ深く感服シ給ヒ當時ノ上杉
侯齊憲君ニモ御懇志ノ御交リナリケレハ鷹
山公ノ遺書等ヲ乞ヒ借ラレシトモアリ齊憲
君モ公ノ御志アルヲ知ロシメシタルト故
ニ世上ニ容易ニハ出タサレス秘府ニ藏セラ
ル、處ノ鷹山公手澤ノ書ヲモ借シ玉フ即チ
南亭餘韻此書ハ鷹山公ノ手書シ玉ヒタル命
令或ハ女公子方ヘ御戒告ノ假名文
等ヲ集此ハ米沢ニオイテサシモ賢臣
シナリ焉度篇此ハ高カケル老臣荏戸九郎
兵衛鵬カ著セル書ニシテ人君ノ職ハ人ヲ知
ルヲ以テ第一トステ經史百家ノ書中ヨリ
人知ノ法ヲ論辨發揮シタル處ヲ拙出シ切實
ニ和解シテ上リシナリ即鵬ノ自筆ニテ上リ

人知ノ法ヲ論辨發揮シタル處ヲ拙出シ切實
ニ和解シテ上リシナリ即鵬ノ自筆ニテ上リ
玉ヒ本ヲ借リシ等是ナリ公皆秘寫シ玉ヒテ常
ニ坐側ニ置セラレ玩ハセ給ヒシナリテ義敬謹
公ノ諸明君ヲ慕玉フ厚ト謂ヘシ然レ一君
ニ一事ナキニ非ス獨リ鷹山公ニ於テハ感服シ
又事ナキ別テ甚シキト本ノ言テ如シ故諸
明君ニ於テハ靈感芳烈ナト計リノ如シ呼ナサ
レ公ノ字ハ御呼ケ成サレナリ蓋シ景慕ノ餘
ハ鷹山公ト御呼ケ成サレナリ蓋シ景慕ノ餘
ニ出テ公ト御呼ケ成サレナリ蓋シ景慕ノ餘

一 公既ニ肥前侯秋月侯ト深く交リ玉ヒ治道ノ
御講論アラセラレケルニ右二侯ノ國ハ即チ

我隣境ノ一ナレハ猶又其封内ノ政教風俗等
 ヲモ聞召シ度思召サレ窃ニ近臣村上守太郎
 量弘ニ命セラレ二國ノ善政美談等ヲ傳聞ノ
 儘録シテ上ラシメラル量弘ハ近臣ニテ東
 邸ニ出テ御側ニ侍リシカト俊ハ多ク久留米
 ニ歸リ居ケルヲ公其學識アルヲ知ロシメ
 シケレハ遙ニ此事量弘即テ見聞録一冊ツ、
 ラ命セラレシナリ量弘後テ儒臣ニ轉職シ國老
 作りテ上リケルヨリノ意ヲ受テ東北諸州ヲ
 遊歴シ水戸仙臺相馬莊内會津米沢等ノ見聞
 録數卷ヲ作りテ差出シ公ニモ一部ツ、見聞
 呈セリ其善ヲ好ミ玉フノ誠推知奉ルヘシ
 一 天保十二年辛丑 公御年二十ニテ 大良公

人御名代トメ藩ニ歸リ給ヒケルニ公ノ仁
 心仁聞己ニ國中ニ洽カリケレハ人或ハ新政
 アランカト想望セシニ公ハ固ヨリ一意ニ
 父君ノ命ヲ奉シ玉ヘル御事ナレハ監撫一年
 ノ間一事モ專ラニシ玉フ一ナク慎黙自修シ
 玉フノミナリシ左レ氏学校ニ臨マセラレ諸
 生ノ業ヲ試ミラレ又ハ武榭ニ入ラセラレ諸
 士ノ技ヲモ閲シ玉ヒシ眞實ニ其事ヲ樂ミ玉
 ヒ優劣長短皆御心ニ留ノラル、ノ誠自然ト
 衆人ノ心根ニ徹シ愈文武ノ道ヲ勵ミケルト

ナリ其他野遊シ玉ヒ或ハ渙獵等ニ出テ玉ヒ
テモ差タル自立シ事ハ行ハセラレサレ氏恤
民ノ御實意事々物々ニ溢レシカハ庶民未々
マテ御徳義ヲ感セシ一實ニ誠ノ捨フヘカラ
サルヤ如此トイフヘキ
一 同年九月晦日ハ始封ノ祖 春林院殿豊氏公
二 百年ノ御大祭ニ當ラセラレ梅林寺ニ於テ
重キ御法事行ハレ 公ニモ御詔アリテ御拜
礼アラセラレ其時仰ニ予圖ラヌモ父君ノ命
ヲ受ケテ幕府ヨリ暇ヲ賜リテ始テ藩ニツキ

始祖ノ大祭ニ値フ一祖宗ノ神靈ニ對越シ感
ニ堪ヘスト宣ヒケル其時ノ御詩作左ニ記ス
天保十二年九月庚辰值
春林公二百年之大祭因恭賦
天下大乱天正間朝生夕死實難期 祖宗英
名著簡策跋涉山川任驅馳原城破賊超睥睨
抗瀨隔水舞牙旗禁暴戢兵無窮業安民和衆
太平基豊功偉績拔郡將二百年未膏澤遺衆
臣歸馬學士道黎民放牛務農功時遇今秋第
一 祀展禮奈盛靈壇中顧思綏々生樂世身汚

拾遺補闕官春夢已積二十歲駒隙忽々日月
頻赤心一感自奮激只願千歲蒼生安
此卿作ヲ拜吟スレハ公ノ國家蒼生ニ卿心
ヲ勞セラレシ卿一生ノ卿事業ハ實ニ祖宗
百戰ノ艱苦ヲ思召サレ創業ノ昔ヲ深ク感シ
サセラレタル大孝ノ卿心ニ基ツキタル卿事
ナリ儲コソ僅ニ三年ノ卿享國ニテ然モ過半
ハ卿病牀ニアラセラレナカラ能ク功ヲ宗社
ニ存セラレ澤ヲ生民ニ遺サレシ不洵ニ偶然
ニアラズ難有シ泰シト頌シ奉ルモ猶怨アル

一 此モ同年ノトニテアリシ公卿召料ノ甲曹
ヲ國ノ丞工今井某ニ令シテ造ラセラレシニ
參政ノ内一人申上ケルハ卿儉約ト申ナカ
ラ餘ノ卿品ト替リ卿著具ノ事ナレハ卿代
代様卿道具トテ永久ニモ傳ヘラルヘキ物ノ
事故卿金物類ハ總テ金無垢ニテモ然ルヘシ
ト申ケルニ無公仰セアリケルハ汝カ不ノ處
モ一理ナキニアラス然レ氏當今國用窮迫ニ

テ農商ノ財ヲ借リ僅ニ用ヲ給スル時節武器
ナレハトテ無益ノ費ヲカケ金無垢ノ飾ヲ用
テ後世ニ遺スハ予カ愧ル處ナリトテ御事ニ
テ只質素ノ御金物ニテ出来シナリ
一 我藩鎗術ニ諸流アル中ニ君上ニハ大良公
ヲ始メ奉リ諸公子ニ至リ至^玉マテ皆宝藏院
磯野派ヲ学ハセラレ此流ヲ稱シテ御流義ト
唱ヘ公ニモ即テ此流ヲ学ヒ玉フ然ルニ妙
見自得流ノ師範タル井上弥左衛門ハ格別ニ
其技ノ妙術ヲ得テ其名遠近ニ夷キ門人モ衆

多ニシテ絶藝ノ輩モ亦少ナカラス公覽閱
シ玉ヒシ時深ク其妙ニシテ且盛ナルヲ感セ
ラレ思召ニ叶ヒタル旨其後モ度々御話アリ
ケルニソ或時老臣ノ内一人左程ニ思ヒ玉ハ
ハ自得流ニ御改流ニテモ然ルヘシト申上ケ
レハ公仰ニ實ニ弥左工門ノ絶技ハ予モ学
ヒタク思フナリサリナカラ熟慮スルニ今自
得流一國ニ盛ニ行ハレテ父君以来学ヒ玉
ヒシ流義ハ日々廢レナントスルニ似タリ然
ルニ予モコレマテ宝藏院流ヲ学ヒタルヲ今

亦予カ自得流ニ改メシト聞カハ恐クハ國中
ニテ他ノ流ハ益衰ヘヌヘシ予カ心ニテハ万
事平等ニテ有来レル諸流各其所長ヲ逞フシ
國中ニ並ヒ行ハレシコソ願ハシケレハ先
ツ改流ハスマシキト宣ヒテ其儘ニ過サセ玉
ヒキ
一天保十五年甲辰^{十二月}改元弘三月大良公東觀
シ玉フ御旅次ヨリ御病氣ノヨシ著府ニ給フ
前ニ迫リテ飛脚達シケレハ且公大ニ驚カセ
玉ヒ御着ノ日ハ高輪ノ下郎マテ出テ迎ヘサ

セ玉フ夫ヨリ三田ノ本邸ニ入ラセ玉ヒテ後
モ始終御病牀ニ侍セラレ晝夜御看護ナシマ
イラセラル所謂衣帶ヲ解カス湯藥必ス親ラ
嘗ルノ誠ヲ盡サセラル其間ニ父君ノ兼々信
シ給フ神祇へ禱祠間断ナク頼マセラレ已ニ
大良公御危篤ノ際ニ至リ目黒村ナル金毘羅
神へ公ニモ詣シ玉フヘキノヨシ父君ヨ
リ仰セアリシニ此時ハ公一刻モ御側ヲ去
ラセ玉フニ忍ヒ玉ハス又命ニモ背カセ玉ヒ
難ク即テ駿馬ヲ召サレ往來三里ニ近キ所ナ

ルヲ唯頃刻ニ詣シ玉ヒテ速ニ歸ラセラレ直
ニ又卿病牀ニ侍シ玉フ卿苦心ノホト忍察奉
ルヘシ
一右ノ如ク公ニハ至孝ノ卿心ヲ盡サセ玉ヒ
シカト天命如何トモスヘカラス四月二十三
日大良公卿四十八歳ニテ終ニ館舎ヲ捐サ
セ給フ公ノ卿悲哀中々筆舌ノ盡スヘキニ
アラス卿顔色モ憔悴シ玉ヒ夜ノ卿牀ニ入ラ
セ玉ヒテモ通宵眠ムラセ玉ハサリシトモ多
カリシトナンカクテ五月七日澀谷祥雲寺ニ

葬リ奉ルニ公舎第孝五郎君即今公ニテ
ト御一同ニ卿供ニ立セ玉ヒ龕前堂ニ靈柩ヲ
居ヘ奉リ公卿手自ラ靈牌ヲ捧ケラレ卿柩
ノ前ニ直サセ玉ヒ卿側ニ侍リ玉フ孝五郎
君ニモ其次ニ侍リ玉ヒ夫ヨリ僧侶行導読經
ノ勤行モ事畢リ公卿兄弟引續キ拜礼シ玉
ヒ卿親戚ヨリ遣ハサレシ代香ノ輩拜シ畢リ
即チ群臣ニテ靈柩ヲ擡ケ奉リテ卿墓所ヘ移
シマイラスル此時公ニハ弟君ト共ニ所謂
ル菩提門ノ側マテ出サセラレ卿跡ヲ見送り

玉ノ御アリサマ實ニ悲哀ノ至リ見ルモノ情
ヲナシカタカリシ御事ナリシ浮屠ノ法ニテ
ハ龕前堂ヲ作リ俗ニ御火屋ト称ス四ツノ門
ヲ建ツ所謂涅槃般發心修行菩提ノ式アリテ後
提門ヨリ出テ葬地ニ種々勤行ノ式アリテ後
此時ハ予本堂警護ノ役ニテ本堂ニアリテ後
公ノ御アリサマヲモハルカニ見奉レリテ後
一 御代々舊例ニ國君薨シ玉ヒテヨリ未タ葬リ
奉ラサル間ハ靈牌ヲ常ノ御居間ニ置キ奉ル
既ニ葬リテ後ハコレヲ御客坐敷ヘ移シ奉ル
一 ナリコレ常ノ御居間ハ嗣君ノ入ラセ給フ
所ナルヲ以テナリ大良公ノ御葬儀已ニ畢

リテ後有司例ニ仍テ靈牌ヲ移シ奉ラント請
ケルニ公宣ヒケルハ舊例ハサモ有ランカ
予カ心ニテハ遽ニ父君ニ代レリトスルニ忍
ヒス唯其儘ニ置キ奉レトノ御事ニテ終ニ國
制ノ喪ヲ終リ玉フマテ靈牌ハ常ノ御居間ニ
アラセラレタリ老臣有馬織部照長此事ヲ聞
テ感泣セシトナリ
一 是ニ御代々ノ例トナ嗣君襲封シ玉フ時ハ國
中士民ヘ新立ノ君ヨリ法令ヲ出シ玉ヒ読渡
スナリ其ニ政事ハ例ニ據テ君上直裁ニセ

ラル、ノ旨ヲノセラル、一ナリ公已ニ喪
ヲ免シ襲封ノ御礼ヲ幕府へ申シ上ケサセ
玉ヒテ後有司ヨリ法令ヲ乞ヒ例ノ如ク直裁
ノ旨ヲ書キ入ルヘキヤト窺ヒケルニ公仰
セラレケルハ予不肖ナカラ已ニ先君ノ御願
ニ因テ命ヲ幕朝ニ受ケ一國臣民ノ主ナリ
君タリシ身ノ政事ヲ躬ラスルハ勿論ナレハ
改テ言ニ及ハス予ハ君職ヲ守リ老臣以下大
小ノ諸有司各其職ヲ守リテコソ國政ハ行フ
一ナレハ故サラニ直裁ト申渡スニハ及フマ

シト宣ヒ法令中ニ直裁ノ文字ハ此時ヨリ省
キ玉ヘリ竊ニ按スルニ此一事ハ卒然トノ
元来此政事直裁ノ文ヲ用ヒ玉フニ似タレハ
ニ矯激セラシムルトコロアリテ用ヒラレタ
ヲ其後因循シ来ルヲ爰ニ至テ
始テ改メサセ玉ヒタル一ナリ

一 君側ノ衣服器用其他雜事ノ費用ノ財ヲ掌ル
ハ夫々其職アリテ出入ヲ計リ政府ヨリ受テ
コレヲ取扱フ其外ニ御手許金ト唱ヘ別ニ金
銀ヲ貯ヘ置キ近臣ニコレヲ掌トラシメ此ニ
テ内々ノ玩好賜与ナトニ供セラル、一ナリ
公襲封シ玉ヒテ後有司ヨリ御手許金ヲ貯フ

ルノ數ヲ請ケルニ公宣ヒケルハ予ハ已ニ
 諸有司アリテ諸用ヲ供スルナレハ別ニ手許
 ニ財ヲ蓄ルニ及ハス玩好賜與ハ皆表向ニ命
 スル心得ナレハ手許金ノ事ハ沙汰ニ及ハス
 ト仰セラレ公卿一世ハ此事止ニタリキ
 一公世子ニテアラレシ時ノ御手許金ノ餘リ猶
 數百金アリケレハ有司如何セント請ヒケル
 ニ公仰セニ弟君妹君御兄弟御姉妹ノ御是
 迄ノ儉約中サコソ不自由シ玉ヒシナランセ
 メテ其金ハ不殘御部屋ノ附々ニ分テ與ヘテ

何品ニテモ各好ニ玉ノ物ヲ調ヘテマイラセ
 ヲト申シ傳フヘシトノ玉ヒ皆分テ贈ラセラ
 ル聊モ御手許ヘハ留メ玉ハサリシナリ謹テ敬
 按ヒスルニ此時御姉妹君老ヨリ御望ノ品ヲ
 窺ヒケレハ皆衣服ニ類ヲ好ニシテ御望
 ノ品ヲ差上ケシ獨ノ類ハ望ニシテ私テ仰
 ラレテハ衣服ニ類ヲ望ニシテ私テ仰
 ナク讚ルハ家ニ嫁申ス物ヲ見苦ルシ程
 ス兄君御指ノ中ノ願ハ物ヲ守リ大ニ賜
 リタシ望ノ品ニテ願ハ物ヲ守リ大ニ賜
 モリ望ノ品ニテ願ハ物ヲ守リ大ニ賜
 ノ中備前國康光ノ御刀ヲ感レ玉ヒ是迄
 指ニ御前國康光ノ御刀ヲ感レ玉ヒ是迄
 後誼姫君御婚ニ出テ程ナク夫ハ別ニ其
 ヒシカ終始婦道ヲ守リテ頗ル貞操ノ御聞
 アリシナレハ予此文ヲ寫テ感スル所
 此所ニ贅スルナリ所ノ御聞ハ玉

一 公ノ御兄弟姉妹ノ方々廿餘人アラセラレタ
レ氏早世シ給ヘル方多ク現ニ存シ玉ヘルハ
御姉君美姫君常州笠間城主牧野越中守貞一
君ノ室トナラセ玉フ貞一君卒去セラレテ後
養壽院殿ト称シ奉ル御妹君竹姫君常州土浦
城主土屋采女正寅直君ノ室トナラセ玉フ御
弟君格助頼功君石州津和野城主亀井能登守
茲方君ノ養子トナラセ玉ヒテ隱岐守茲監君
ト申奉ル次ノ御弟君孝五郎頼多君ハ後ニ中
務大輔慶頼公ト改メ玉ヒ即今公ニテアラ

セ給フ次ノ御妹君謳姫君讚岐高松ノ世子松
平右京大夫頼熙君ノ室トナラセ玉フ頼熙君
卒去セラレテ後常諦院ト称シ奉ル次ノ御妹
君親姫君初ハ琴姫君ト加賀ノ世子松平筑前
守慶寧君ノ室トナラセ玉フ次ノ御弟君ハ富
之丞頼教君ナリ公孰レノ御方ニモ御友愛
ノ情厚クアラセラレシ
一 右御方々ノ内美姫君竹姫君ハ大良公御在
世ニテ婚嫁シ玉ヒ茲監君モ亦大良公御在
世ノ日亀井家へ入ラセラル謳姫君ハ許嫁ハ

大良公ノ時ニナシ玉トケレ氏公ノ卿代ニ
至リ高松家へ入ラセラル親姫君ハ公ノ卿
代ニ加州家へ許嫁シ玉ト今公ノ卿代ニ至
リ彼家へ入ラセラル親姫君許嫁ノ議アリシ
時公曾テ予ニ加州ハ大國ニテ我偶ニ非ス
且國用窮迫ノ時資粒モ意ノ如クナルマシケ
レ氏唯父君鐘愛ノ女ニテ彼家ヨリ婚ヲ求
メラル、一父君卿在世ナラハサコソ悦ヒ
玉ハント思ヒ出レハ儉約中ナカラ如何モシ
テ此縁ヲ結ヒタク思ヒテ資粒儉薄ノコヲ申

入レシニ彼家ニモ領承ノヨシ申来リテ事速
ニ整ヒ我カ悦ヒ何カハコレニ過ントノ卿物
語リアラセラレシ加州侯齊泰君ノ夫人ハ
姫君ト申シ奉ル世子慶寧君モ即チ其好生ナ
リ親姫君彼へ入ラセラレケルニ齊泰君溶姫
君ト共ニ深ク親姫君ノ艶麗幽閑ナルヲ愛シ
玉トケルトナリ公卿在世ニテアラレナハ
其喜如何ハカリニ袂ヲ濕セリ
一亀井隱岐公君茲監ハ公ノ同母弟ニテ即チ松
濤院殿田中氏ノ出ナリ沈毅ニシテ經國ノ志
ヲ抱カセラレ英断果決ノ性ニテアラセ玉ノ
公ヲ深ク愛敬シ玉ト公モ亦殊ニ卿友愛厚

クアラセラレ時々治道ノ御談論アラセラレ
隠州公御養家へ入セラレ直ニ襲封シ玉セ父
君能登守茲方君ハ老侯ニテアラセラレ御政
務其外事ニ當リテ處セラレカタキ一ハ皆密
ニ公ニ問ヤ玉ヒテ行ヒ玉ルヤト忍察シ
奉ラレシ公嘗テ学問政事一途ニシテ能己
ヲ修メ人ヲ知リ時ヲ識リカヲ量リテコソ國
家中興ノ業ヲモ成シ得ヘキ一ニテ其修己以
下ノ事ヲ為サント欲セハ經ニ本ツキ史ニ參
ヘ時勢ノ人情ヲ熟考シテ實学ヲ勤ムルニ非

サレハ得ヘカラス志ノ正シキヲ恃ニ氣ノ壯
ナルニ任セ輕卒ニ事ヲ行ハントスル寸ハ其
事ハ善トイヘ正顛蹶セサルモノ鮮シトノ御
心ヲ親筆ニテ綴ラセ玉ヒ一冊子ノ書トナシ
テ隠州公へ進セラレシ一アリ其^書予モ密ニ
一覽ヲ許サセ玉フ拜読セシニ間一^書辞ヲ贊ス
ル一能ハサリシ此一事ハ公ノ蘊蓄シ玉フ
識カト友愛ノ深クアラセラレタル一ヲ併觀
奉ルヘキモノニテアリシナリ

寄懷龜井隠州

夏過秋去夢魂驚獨望北天翠黛橫河上長風
吹我袂樓頭孤月照君營曾留江府思鄉國今
在朱城慕弟兄願合石山與筑水相携且語友
于情

此ハ乙巳ノ歲冬ノ初公米府ニテ卿病間隱
州公ハ石州津和野ニ在ラセラルハ寄懷シ
玉ヒタル卿作ナリコレニテモ其相慕ヒ玉フ
情推知シ奉ルヘキナリ此卿作ニハ隱州公
ヨリモ和答ノ詩ヲ贈ラセ玉ヒシカハ公ノ
卿病ツイニ翌年丙午七月ニ至リテ大漸シ玉

ヒケレハ終ニ相見玉フヲ得サセ給ハサリ
シ今ニシテ此詩ヲ録セント欲スレハ淚先ツ
落テ禁スルヲ能ハサルナリ

一笠間ノ牧野家ニテ美姬君ノ配シ玉ヒシ越中
守貞一君廿餘歳ニテ世ヲ早フセサセ玉ヒシ
後幼君二世續ツキ家臣ノ内跋扈ノモノ有テ
士心沸騰セシトアリシヨシ其時公卿近親
ノ故ヲ以テ密ニカラ出シ鎮メ玉ヒシトアリ
テ彼家ノ士深ク公ノ卿德義ヲ仰キ奉リタ
ル輩モアリトカ聞立然レ其事固ヨリ秘密

カ平公ニハ猶又御年少ヨリ深ク治術ニ御
心ヲ注カセラレ講明シ玉ヒテ當今極弊ヲ拯
フノ道ハ士ヲ愛シ民ヲ恤ニテ以テ本ヲ固フ
シ儉ヲ尚ヒ奢ヲ禁シテ以テ用ヲ贍シ武備ヲ
修メ士氣ヲ興シ以テ國俗ヲ敦フスルノ今日
切要ノ務ナルヲ洞知シ玉ヒケルヲナリケ
レハ己ニ襲封免喪シ玉ヒテヨリ漸々諸老臣
へ德音ヲ下シ給フ時モコソアレ長崎港へ異
國船渡来シ其意未タ測ルヘカラサルノ間西
海ノ諸藩兵備ヲ嚴ニセラルヘキ旨時ノ奉行

伊澤美作守殿ヨリ令セラレタルヨシ米府ノ
老臣ヨリ告来リシカハ公殊ニ驚カセ玉
ヒ今我大喪未タ幾ハクナラス予菲才ヲ以テ
祖宗ノ封土ヲ繼キ國家艱難ノ際ニ當リテ此
變ヲ聞キテハ寸劍モ因循スヘキニアラスト
テ夫ヨリ愈老臣ト議シ玉ヒテ遂ニ大儉ノ令
ヲ敷キ武備ヲ修ムルノ端ヲ發シ玉フ實ニ天
保十五年甲辰七月廿三日ノ事ナリ義敬謹テ
此時公大ニ驚キ玉ヒ早速近臣石野陸三郎
好禎ヲ久留米へ遣ハサレ留守ノ老臣氏へ下
知セラレテ候トアリ且長崎へモ陸三郎参リテ
夷人ノ情ヲ伺ヒ来レトテ八月朔日江府ヲ發

ス又非常ニ及ヒ時ノ事計リ玉ヒ江戸
ノ糧米マテモ大畧御手段定マシ
来レハトテカクマテ驚キ給フニ及
キト云フ者アリ公聞カセラレハ
ルハ成ル程其道リカクニハ及ハ
ニ似タリ然レ太卒ノ久シキ俗人
軍國ノ事ヲ思ハサル久シキ俗人
レ此夷船ニ藉ヒテ改革ヲセニハ
ムルノ一助ナリ其上夷人ノ情モ
ヘカヲサレ者アリ故ニ予如ク事
時ニ當リ因循苟且スル者一且事
ハ盡ク狼狽スヘシ予今日如此ナ
ニ對センハ却テ意思安閑泰然不
一ヲ欲スルナリト仰セラル余將ニ
ナリシ

一 公儉令ヲシキ玉フニ先ツ近侍有リ始ムヘキ
下理ノ當然ナレハ米府ヘソ令ハ姑ク舍キ我

今江戸ニアルナレハ先ツ此ヨリ始ムヘシ
トテ即チ江戸三郎へ大儉ノ令ヲ下シ玉フ其
式ハ七月廿三日大儉ノ大綱ヲ親筆ニ玉ヒ郎
中ノ諸士貴賤内外トナク盡ク召シ出シ小書
院へ列居セシメ公親ラ臨ミ玉ヒ此度國
家万民ノ為メ非常ノ大儉約ヲ申付ル書付申
渡スアヒ夕熟聽セヨト宣ヒ右親筆ヲ有馬織
部照長へ渡シ玉ヒ照長ヨリ予ニ渡ス予受取
リ奉リ御前ニ於テ讀渡ス一過セシ上公
又款レモ堅ク相守レト宣ヒテ入り玉フニ列

居ノ諸士皆肅然トノ敬聴セサル者ハナカリ
此時予ハ講学所講官夫ヨリ條令細目ヲ出
ニテ伴讀ヲ兼居タリ玉ト老臣ヨリ申傳ヘケルニソ其勢流水ノ
如クニテアリシ
一公ノ儉ヲ行ヒ玉ヲニ其御工夫常に迄ニ求メ
内ニ向ヒ玉ヲサレハ右ノ如ク儉令ヲ下シ玉
ヒシ時ノ仰セニ諸臣一統ニ嚴シク儉ヲ行ハ
シメント欲セハ先ツ近習側向ノ者ヲミテ守
ラシムルニ非サレハ不可ナリ近習側向ヲ
テ守ラシメト欲セハ奥向婦女ヲ嚴ニスルニ

アヲサレハ不可ナリ而シテ其本ハ予ト夫人
トニアルト宣ヒ表向一統ニハ今辰年中ヲ緩
クシ来ル乙巳年ヨリ全ク綿服婦人ノ首飾金
銀鬘甲等ヲ禁セラレ、ノ旨令セラレケレ
近習左右ニハ表向ハ右ノ如クナレトナルヘ
キタケ今年内ヨリ格別質素ニ及ルヘク旨命
セラレ宮官中ノ事ニ至リテハ諸宮女ニ嚴シク
儉ヲ命セラレニ上綿服ヲ其人々ノ紋ヲ付ケ
染サセ玉ヒテ一統ニコレヲ賜リ且公御自
身ハ勿論直ニ麻木綿ノ衣袴ヲ常ニ用ヒ玉ヒ

御肩衣ナトハ御上下ノ古キ肩ヲモ用ヒ玉ヒ
夫人晴姫君ニモ御首飾ハ皆木製ニテ漆飾ニ
タルモノ又ハ竹製等ヲ用ヒサセラレ勿論常
ニ綿服ヲ用ヒ玉ヒ公ノ御膳部モ表御臺所
ニテ御献立役御料理人等ノ手ヲ大儉ノ中ハ
相止メラレ奥^向御末仕立ニテ夫人公子女
公子方ト同様ニテ召上ラル尤其品モ改テ儉
薄ヲ命シ玉ヒテ御末仕立トハ宮中ニテ御走
リ公子女公子方ノ御膳ヲ仕立シヨイフ朝
調味拙^フシテ表御臺所ヨリ甚々手輕ナリ朝
夕一汁カ或ハ一菜位ナリ尤魚類ヲモ用ヒラ

ルレ氏其菜ニハ大根芋豆腐ナトノ類多カリ
シトソ或時左右ノ臣ヘノ御話ニ鳴尾カ好ミ
ニテ日々ノ芋汁モ面白シトテ笑ハセ玉ヒキ
御末仕立ノ料理ハ皆老女ノ指揮ヲ受ルナ
リ此鳴尾トイヘル老女ハ年久ク御幼少ノ
女公子方ヲ養育シ奉リ至テノ好人ニテ芋ハ
御幼少ノ御方ニハ宜シキ物トヤラシ聞覚ヘ
居テ常々ワイラセ公御一同ニ召上ラ右ノ如
ル、時モ猶シカセシ故ノ御戯ナリ
クナシ玉ヒケルニ年来奢侈ノ流俗ニ長セシ
者動心駭目ニテ或過甚ナリト思フ輩モアリ
シトナン去レ氏君上既ニ如此躬ヲ以テ率勵
シ玉フナレハ下タルモノ誰カハ風靡セサ

ルヘキ數月ノ間ニ江戸ノ三郎盡ク質素ノ風
ニ改リテ此事米府ヘモ聞ヘケレハ闔境ノ士
民皆風ヲ聞テ振起シ一言ノ令一行ノ書モ未
夕出スミテ人々相励ニ崇儉禁奢ノ心ヲ興シ
ケル儲コソ入封シ玉ヒテ後儉令ヲ國中ニ施
シ玉ヒシ二人ノコレニ從フテ水ノ濕ト從ヒ
火ノ燥ニ就クカ如クナリシニ義敬謹テ按スル
ヒ玉ヒテ闔國振起セシ一本文ノ言トコ口ノ
如シ然氏當時老吏輩今迄ノ旧習ニテ儉トサ
ヘ言ハ下ヲ詰メルト身心得ヘテ御利益トサ
云下ヲ唱ヘ政府ニ出テモ役所ニ居テモ動モ
スレハ如此ナトハ御利益如此ナレハ御利益
ニナラズナトハ唱テ諸向ノ賜ハル物ヲ詰メ

ナトセント思フ者中ニハ多カリシナリ公
此事ヲ深嫌イ玉ヒテ仰ケルハ是儉ノ趣意ヲ
解セサレハナリ予カ誠ノ至ラヌトハ雖氏下
ヲ損シ上ニ益スト思ハ大ニ非ナリトテ此年
ノ冬十二月廿一日政府ヨリ諸官ヘ書付テ渡
セシナリ其書付下ノ卷附録ノ中ニモレケレ
ハ此ニ書入ル
ル左ハ如シ

先般法大位被仰出諸役ニ相勤外面ニ
精力相尽以省畧筋直以存付以様ハ早速
可申出者宜仰出置外一併此度之内趣
意御身早クを初上之御入費も如何
程也宜相省下ニ不及難義格との思召外
然受上之御不自由也宜乃及以格也

後下存案申出儀ハ鬼角差知以奉
被思召以是畢竟清淨意不被為至故
と深く被遊 法若ハ以以省畧取以以
上之出入費を不省以以自下之入
方亦相減以像出来以以難計以下之像
ハ連之入流方号亦減及困窮以以後
以深察以以在只今之入差支之入流方
号難亦増取ハ不流已
第一下之入流方亦下物亦亦減 上之法
利益之致以以義者之以以甚以思

召之相肖以以付於更吃度亦亦
忠之亦趣意亦亦以以可取計此旨相人
以以如との 法少法之可

一 前ニ録セシ諸士ヲ小書院ニ列居セシメ親ヲ
大儉ヲ命シ玉ヒテ後吉見七次郎勝雅ニハ勝雅
用人並ニテ公ノ世子ニアラセラレシ時今
ヨリ傳職ヲ勤メ此時モ猶其職ニテアリシ
日ノ命令ハ如何アリシト問ハセ玉ヒシニ七
次郎對テ誠ニ英斷ヲ以テ非常ノ大儉ヲ施シ
玉フ下々ニ於テ難有キハ勿論ニテ且親
筆ノ御文體モ恐ナカラ感ニ奉レリ但今今日

ノ事ノ如キハ崇儉ノ御實意ヲ諸士へ親ラ諭
シ玉ヲ御事ナレハ御音聲御辭氣ハ猶更御平
和ニテ仰セラレナハ殊ニ人ニ入ルヘキナ
ルニ今日ハ御顔色正シク御辭氣ノ間嚴厲ニ
テ人ヲ叱リ玉ヲヨウニ聞ヘ群臣皆恐悚ニテ
聽從セシ如ク相見ヘタリト申上ケレハ公
領キ玉ヒテナルホト是ハ言ハレタリ予今日
ノ心地ニテハ辭氣言貌實ニ汝カ申ス如クナ
ラン是ハ我カ所短ニテアリシト宣ヒケル此
事ハ後々ニモ時々御話ニモ出シ玉ヒテ予モ

直ニ拜聽セシトモアリシ
一 儉令ノ中ニ諸士末々マテ男女ニ限ラス貴賤
ニ拍ハラス綿服タルヘキ旨命セララル去レ
七十歳以上ノ老者ハ夕トヒ輕輦タリヒ縮服
着用ニテ不苦ノ旨令セラレ君上ニハ前條
ニ出セシ如ク公夫人共ニ綿服ヲ用ヒサセ
玉ヒケルニ獨御生母松濤院殿ノミ七十歳ニ
滿ラレストイヘヒ縮服ヲ許サレケレハ參政
ノ中ヨリ夫人スラ已綿服ヲ用ヒ玉ヲニ松濤
院殿ニハ縮服ヲ用ヒラル如何アルニキ

ヤト申上ケルニ公仰セニ奥方ハ予カ妻ナ
レハ万事予ニ従ハル、論ニモ及ハサル
ナリ松濤院ニ於テハ身ハ賤ニク共予カ母ナ
レハ是ハ予ニ對シ許シクレヨトノ御事ニテ
アリシトナリ
一 公儉ヲ施シ玉フ中ニモ公子女公子方ニ是
迄モ追々ノ節儉ニテ事々不足勝チニテ才ハ
セシニ此上又儉ヲ施スヲ以テ專事ニヨリテ御
^{欠ニテ}僻ヲ生セラル、ニ至リテハ御生長ク御為
メ惡シカリナント思召サレ其意ヲ御附々ノ

輩へ諭サセ玉ヒタルトモアリシナリ公御
召仕ノ女中モ暇ヲ賜ハリ公ノ侍妾ノ事ハ前
ニ録セシ如ク曾テ
退ケラレシカト御名代ニテ國ニ就カセ玉ヒ
ケル時又父君ノ命ニテ京師ヨリ抱ヘ玉ヒテ
國ニ置キ玉ヒシカ後又江戸ニ來リ居夫人ノ
シラ此時身ノ暇ヲ賜テ京ニ歸レリ夫人ノ
御側女中ヲモ人數減セラレシカ謳姫君親姫
君富之丞君之御附女中ハ一人モ減セラレサ
リキ
一 今公其時公子ニテ御十七歳ニテアラセ玉
ヒ公ト共經義ヲモ講習シ玉ヒケルニ四書
大全ノ善本ヲ別ニ一部求メ玉ヒキ旨仰セラ

レ其頃公子ノ傳タリシ福永万次郎ヨリ財
用出納ノ一ヲ申セシニ參政ノ内一人コレヲ
聞キ御有来リノ御納戸本ノ内古本アルヲ取
出シワイラセテ宜シカルヘシ此大儉ノ時ニ
當リ別ニ善本ヲ求メ玉フ一僅ナカラ無用ノ
費ナラントイヒケルヲ公聞セ玉ヒテ左ナ
イヒソ孝五郎君ノ文學ニ心ヲ向ケ玉ヒ善本
ヲ求メ玉フハ善ハシキ御事ナルヲ聊ノ費ヲ
厭ヒ右ノ如クイハシニハ甚々予カ心ニ違ヘ
リ儉約トハ此等ノ謂ニハアラス唯御勝手ニ

一 求メ玉フヘキノヨシ申セトノ御事ニテ即求
メサセ玉ヒケリ

一 此年天保十年夏江戸城ノ御本丸炎上アリシ
カハ再ヒ營造セラレ諸侯皆其分ニ隨ヒ財ヲ
献シテ費用ヲ助ケラル公ニモ即チ金ヲ納
レ費ヲ助ケニ一ヲ請ヒ玉ヒニ幕府ニモ
悦ハセ玉フヨシニテ請ニ任セ献金ヲ命セラ
ル然ルニ代々ノ例トシ襲封ノ始メ幕府ヘ
ハ必ス助役ノ金ヲ出シ玉フ一アリテ其時ハ
國中農商ヨリ歛シテ公上ノ用ニ供セラレ

ルナナルニ此度ハ公連年國民ノ困窮ヲ恤
マセラレ特ニ命シテ民ニ取ルヲ免シ玉ヒ
御身ノ縮衣節食及ヒ諸官ノ用ヲ減セラレシ
餘リヲ以テ公上ニ供シ給ヒ國中ニ令スル
ニ此意ヲ以テ玉ヒ下々ニテモ予カ此心ヲ
體スル者アラハ貧者ハ自ラ勉テ人ノ力ヲ煩
サス富者ハ力ヲ計リ贏餘ヲ以テ貧者ヲ救フ
ヘキヨシ命セラレケレハ國民感戴シテ垂泣
ニ至ルモノ多カリシトソ

一 公維新ノ政ヲ行ヒ玉フトイヘヒ唯儉ヲ尚ヒ

奢ヲ仰^抑ヘテ節用愛人ノ基址ヲ居ヘ玉フノ三
ニテ別ニ更改シ玉フノ業ハ中ニ溢蓄アラセ
ラレシ迄ニテ終ニ事ニ施サル、ニ及ハサリ
シカハ英志ノ期セラレシ處ハ凡下ノ測リ知
ルヘキニアラ子共其端緒ヲ見ルヘキモノハ
舊制調方ノ官ヲ置セラレタルニテコソ知ル
ヘケレ公襲封シ玉ヒ幾程モナクシテ村正
守太郎量弘ヲ東部ヘ召シ寄セラレ新ニ此職
ヲ命セラレ政府ノ傍ニ一局ヲ開キ凡ソ始祖
以來ノ記録簿書斷簡零墨ニ至ルマテ秘府ヲ

傾ケテ縦觀ヲ許サレ藩祖而來累葉ノ制度
沿革ヲ檢校シテ類ヲ分チ序ヲ立テ編修セ
メラル其目ハ官制沿革國計盈縮賦稅民數武
備兵制等ヲ皆條例ヲ以テ取調ヘシメラル是
畢竟國家治平ノ久シキヨリ時ニ隨ヒ世ト共
ニ推移セシメテ多ク要スルニ後世愈侈大華麗
ニ流レ國体尊嚴ニシテ財力不給方目煩碎ニ
シテ大綱或ハ弛ムヲ不免譬ヘハ外榮内瘁ノ
病ノ如クナル今日積弊ノ根元タルヲ洞
察シ玉ヒコレ臣白クテ此官ヲ置テ祖法ヲ修

明セラレ然シテ後其意ヲ酌シテ其跡ニ拘ハ
ラス時ノ宜ヲ揆リ玉ヒ國ノ力ヲ量リ玉フテ
参考審定セラレ至當ノ良法ヲ制セラルヘキ
ノ深意アラセラレタルナラント恐察シ奉レ
リ翌年乙巳ノ秋ニ至リ予モ亦此職ヲ命セラ
レテ量弘ト事ヲ共ニシ丙午年三月ニ至リ舊
制調書十八卷ヲ撰テ奉リ量弘及ヒ予モ職ヲ
轉シタリ然ルニ其後五閱月ニシテ公ノ御
病遂ニ大漸ニ及ハセラレシヲ思ヒ出レハ胸
塞リ心暗シテ筆ヲ下ス處ヲ知ラス彼蒼ヲ恨

ムハカリナリ
一我藩制ニ君上ノ政事ヲ聽斷シ玉フノ政府ヲ
用席ト稱シ參政ノ人々此ニ列居ス是ヲ用席
詰ト稱ス家老ノ詰ル所ヲ家老部屋ト唱ヘ用
人ノ詰ル所ヲ用部屋ト唱ヘ是ハ又
各別ノ所ニ此政府ヲ開キ玉ヒシハ梅巖
アルナリ
中興勵精シ玉ヒシ時ニ創メラレシ處ナリ夫
ヨリ以來奕世君上爰ニ臨ニ聽斷シ玉フノ法
存ストイヘ凡其實ハ絶テ久シク廢セリ公
ノ世子ニテアラレシ時父君ノ命ニテ七月ニ
三度ツ、政府ニ臨ニ玉ヒケルニ東都ニ行襲

封シ玉ヒテ後參政ノ内ヨリ此後モ是迄ノ如
ク毎月三度ツ、政府ニ臨ニ玉フヘキヤ又ハ
最早臨ニ玉フマシキヤト伺ケルニ公仰セ
ニ異ナルヲ申モノ哉我今迄ハ父君ノ命
ニテ政事ヲ見習フヲナレハ三度ニテ可ナリ
自今ハ不肖ナカラ親聽斷スルヲナレハ日々
政府ニ臨ムヘシト宣ヒ毎日朝五時ヨリ九時
迄政府ニ出坐シ玉ヒ參政諸臣ノ謀議ハ勿論
大小諸吏ノ進テ旨ヲ取ルモノヲハ盡ク聽玉
ヒシカハ百事壅滯ナク裁決流ル、カ如ナリ

入封ニ玉ヒテハ尚更日々臨ミ玉フソ御志アラセラレシカハ旅次ヨリ病發セラレシカハ入封ノ翼日ニカ一日臨ミ玉ヒシノニテ其後許多ハ大政皆御床ニテノ御事ニテアリシナリ

一大良公御中年ノ頃ニヤアリケシ家中諸士ノ子弟ヲソ學問ニ興起セシメントノ美意ニテ國校明善堂并東都ノ邸校ニテモ凡素讀ニ出ルモノ世族大家ヨリ倍臣ノ子弟ニ至ルマテ一年出席度數ノ多少ヲ計リ多キモノニハ褒

賞トノ書籍ヲ賜リ尤東西隔年ニ通計シテ行ハル、トニテ二年闕席ナキモノニハ大部ノ書ヲモ賜ルニ至レリ於是一藩子弟靡然トノ讀書ニ興起セリ然レハ一時鼓舞ノ術ニテ唯其出席ノ數ノミヲ校リ讀書ノ優劣志ノ深淺ヲ分タサリシカハ遂ニハ流弊ヲ生シ子弟規輩唯多ク出テ賞ヲ受ルノミヲ志トナシ病アルモノトイヘハ強テ奴僕ニ負ハレ出堂シテ名ヲ籍ニ記スルニ至リ讀書暗劣頑鈍無恥ノ者ハ厚賞ヲ得志厚ク業長スル者トイヘハ疾

病事故アルモノハ賞ヲ不得シテ頗ル濫叨至
レリ公深ク此弊ヲ洞察シ玉ヒ後來大ニ学
政ヲ更張シ實學實行ヲ振起シ玉フノ意アラ
セラレ先濫賞ヲ止テ無恥ノ風ヲ起サルハノ
意ニテ襲封ノ翼年乙巳正月邸校素讀ノ賞ヲ
停メラレ丙午正月國校ニテモ亦停メラル然
ルニ其年ノ秋御天故ニ及ハセテレ學政更張
ノ深意終ニ達シ玉ハカルコソ遺憾ナレ
一弘化二年乙巳ノ正月二十四日大風沙ヲ揚ケ
四方暗黒ナル程ニテアリ如何ニ夕^リケ

ニ江戸城西郭ノ外ナル青山六道ノ衢ヨリ未
シ刻ハカリニ失火セシニ西風^北ノ風益暴ク頃
刻ニシテ數里ニ延燒シ麻布ヲ掠テ申刻ニハ
我芝三田ノ邸ニ迫近シ火势甚急ニ西邊ノ長
屋ニ燒附ニトスル^一度々ニシテ黒烟全部ヲ
掩ヒ夜ニ入りテ益切迫シ西長屋ノ下ナル町
家寺院ニ火移リ我邸實ニ危フカリシカハ
公殊ニ心ヲ痛メ玉ヒ今此國家財力耗屈ニテ
士民久シク艱苦ノ時ナルニ万一火此邸ヲ燒
カハ士民幾ハクノ難義ソヤトテ躬親ヲ近臣

左右ヲ從ヘ玉ヒ郎ノ西南隅ニ出玉ヒテ牀机
ヲ居ヘラレ百事指揮シテ火ヲ防カセラレケ
レハ國老有馬織部モ此處ニ來テ同シク衆ヲ
勵シ參政以下大小ノ諸士皆卒伍奴隸ト共ニ
或ハ水ヲ運ヒナトシテ百方扞禦シタリシカ
ハサシモ烈シキ祝融氏モコレカ為ニ回避シ
タルニヤ我郎ノ南隣ナル佐土原辰薩州支封
進ノ郎モ一舉焦土トナリシカト唯我郎ノミ
尺寸ヲモ燒スシテ火中ニ屹然ト存セリ
ニ三田白銀ヲ經テ我二本榎ノ中郎モ燒ケ高
輪ノ下郎ニモ火入テ園中ノ一小亭ヲ燒ク夜

明ニ至リテ此日公ノ奮勵衆ヲ勵マシ玉フ
始テ熄ムナカリセハ萬々我郎モ免レカタキ一ニテア
リシナリ公深ク本郎ノ無事ヲ悦ヒ玉ヒ翼
廿五日三郎ノ羣臣ヨリ奴隸ニ至ルマテ宴ヲ
賜テ其勞ヲ慰セラレケリ
一乙巳ノ夏公始テ入封シ玉フ四月廿六日江
戸ヲ發軔シ玉ヒ六月七日久留米城ニ入ラセ
ラレケルニ國中ノ士民引領凝望シテ道左ニ
迎ヘ奉リ婦人小兒等ハ儀衛ヲ縱觀セシトテ
境ニ入り玉ヒシヨリ道路ニ堵ノ如ク殊ニ筑

後ノ河ヲ所謂宮地ノ渡リ玉ヒテヨリ城ニ入
ラセ玉フマテハ唯一條ノ道ヲ開キタルノミ
ニテ左右ハ皆疊肩累跡ノ勢ニテ拜觀シ奉レ
リ公ニモ士民觀欣ノ態ヲ深ク喜ハセ玉ヒ
テノ御作ニ乙巳入封作
四旬行盡三千程六月薰風歸故城闔國士
民來迓我一歡一懼此時情
公ノ士民ヲ憂恤シ玉ヒ士民ノ公ヲ慕ヒ奉
ル上下ノ情協洽ノ情態コレニテ知ラレハ

一 公己ニ入封シ玉ヒテ速ニモ新政ヲ出シ玉ハ
ントノ御心ニテアラセラレシ慶東邸ニ在セ
シ時ヨリ御病アリケルカ路次ニテ再ヒ發ラ
セラレ御病ノ委曲ハ入城シ玉ヒテ後ハ深ク
遺體ヲ自養シ玉ヒ梅林寺祖廟ヲ拜シ玉フ
ト城内ノ鎮守祇園社へ詣セラルト國中諸
士ノ慶賀ヲ受ケ玉フ等ノ式終リテ後ハ正寢

ニ起卧シ玉フノミニテ動息ヲ節セラレ思慮
ヲ省カセ玉フ夫故ニ不得止ノ黜陟賞罰等ノ
外ハ何事モ命シ玉ハス細事ハ諸老臣へ委シ
玉ト專ラ病ヲ保護シ玉フ秋ノ末ニ至リ病勢
ヤ、急ラセ玉フニヨリ漸々議ヲ起サセラレ
十月ニ至テ國中ニ大儉ノ令ヲ下シ玉ヒ十一
月ニ至リテ理財ノ法ヲ措置シテ國用ノ定準
ヲ立テ玉ヒ翼年丙午ノ春ニ至リテ武備ヲ修
ムルノ命ヲ出シ玉ヒケルニ夏ニ至リテ御
病又大ニ起セラレシ事ニテアリシナリ

一 大儉ノ令ヲ國中ニ敷キ玉フ其式大凡東邸
ニテアリシ如ク國家士民ノ為メニ非常ノ大
儉ヲ行ヒ上下ノ安泰ヲ期スルノ大綱ヲ親筆
ニシ玉ヒ此ハ御病ノ未タ瘳サセ玉ハヌヲ以
淨書ハ國老有馬播磨泰賢ヲシテ代
筆セシ諸輿詰御手廻リノ諸士ヲ曲水ノ間千
鳥ノ間マテニ列居セシメラレ公親ラ臨ミ
玉フヘキナレ氏病ノ未タ愈ヘサルヲ以テ御
褥ヲ敷キ御刀掛ヲ出御位ヲ設ケタルマテニ
テ御名代第一ノ老臣有馬織部照長ニ命セラ
レ照長御褥ノ側ニ出坐シ御意ヲ傳ヘ此度國

家士民^ハ為^メ非常ノ大儉約^ヲ仰^セ出^サル^ル御
親筆ノ御書拜聽ス^ヘト申述即胸間ニ捧^ケ
シ御書ヲ以テ余ニ授^ク余此時ハ御旧制調方
ニテ侍讀ヲモ兼子勤
リ^メタ余受取り奉リテコレヲ讀ム^ト一過^シテ
後照長又衆ニ向^ヒテ堅ク相守ル^ヘキ^ノ命ヲ
傳^ヘテ坐ヲ立^チニケル外様ノ諸士ハ千鶴止
下ノ間ニ列居セ^シメ御位ヲ皇帝ノ御間ニ設
ケ照長命ヲ傳^ヘテ余カ御書ヲ讀ム^ト總テ前
ノ如^シ右ノ兩坐トモニ余カ讀^テ未^タ了^ラサ
ル^ニ拱手敬聽ノ人々^ノ中ニモ老人^ハ十^ト德意

ニ感^シテ垂泣セ^シ人モアリシトナ^レ然^シテ
後チ老臣ヨリ命ヲ傳^ヘ諸臣寺社農工商賈總
テ國中ニ夫々條目ヲ頒^テ令^ヲ下サレシカハ
浹旬ニシテ境内肅然ト^シ觀^ヲ改^メシナリ
一右ノ如ク儉令ヲ敷^キ玉ヒテ後令ヲ國中ニ下
シ玉ヒ御勝手向御政事筋ニ所存アルモノハ
大小ノ士臣ハ云フニ及^ハス農工商賤民ニ至
ル^マテ直ニ上書シテ申出^ヘクム子命セラレ
シカハ退々上書シテ献^テ芥ノ誠ヲ効^セシモ
少ナカラストナ^シ

一 理財ノ道ハ量入為出ノ一句千古不易ナルト
ハ公ノ久シク熟講シ玉ヘルトナルニ我國
家連年ノ用度浩繁ニテ租賦ノ入一歳ノ用ニ
給スルニ足ラス因テ内ハ封内富民ノ財ヲ借
リ外ハ都會豪商ノ金ヲ假リ皆息ヲ出シテ贖
ヒ来リケレト元来租入ノ不足ニテ已ムトヲ
得サルヨリシテ内外ニ乞暇シテ一時ノ用ヲ
辨スルトナレハ息ヲ出シコレヲ返スノ時ニ
至リテハ愈以テ租入ノ不足ルト年々甚ク即
チ諸有司カヲ盡シテ更ニ借リ返シ一時々々

ト凌キシカハ息ニ息ヲ加ルニ至リ如此ニテ
數十年ヲ累子来リ終ニ如何トモスヘカラサ
ルニ至ル間ニ才幹ノ吏人アリトイヘ凡皆不
學無識ニテ權謀術數ニ任セ目前ノ急ヲ辨ス
ルヲ以テ能トシタリシカハ或ハ信ヲ高買ニ
失フニ及ビケルコソ後ニハ財ヲ借ルノ道ハ
皆塞リテ是迄ノ借金ノ多キトハ一歳ノ租入
ヲ以テ全クコレニ當ルトイヘ凡贖フト能ハ
サルニ至レリ公此事ヲ深ク憂勞シ玉ヒ既
ニ如此ニナリ来レルヲ今邊ニ商賈ニ返シ與

ヘントスレハ祖廟ノ祭祀士臣ノ俸祿非常
ノ武備等皆廢欠ニ至リテ幕府ヘノ御勤ヲ
モ闕カセラル、ニ至ル、目前ナレハ其為ニ
スヘカラサル、勿論ナリ左レハトテコレ迄
ノ儘ニシテ益々息ニ息ヲ加フル、ハ終ニ還
贖ノ期アル、ナク租入弥足ラサルニ至ル、
又明白ナレハ養士恤民ノ政ヲナスノ基ナレ
然レハ今日ノ勢ニ處シ國政ヲ一新シテ士氣
ヲ勵マシ民俗ヲ厚フシ國ヲシテ國々ラシメ
ント欲セハ理財ノ措置ヲナスニ非サレハ万

事為ス、能ハサル、ヲ見定玉、已ニ東邸ニ
テ計吏北川外波正征ニ命シ玉、テ租賦ノ入
ト借財ノ數トヲ精シク吟味シ玉、テ老臣有
馬飛驒知一參政小河吉右衛門ヲシテ浪華ニ
趣キ富商ニ理財ノ事ヲ談セシメラレ入封ノ
後已ニ儉令ヲシキ玉、ヒ上猶又反覆熟議セ
テレ今ノ時ニ當リ今ノ財ヲ理スルノ道返サ
ントスレ、力不給ニテ返スト能ハス是迄ノ
轍ニ由ントスレハ愈淪胥ニテ深キニ陷ル、
分明ナレハコ、ニ於テハ唯從來ノ失信ヲ取

直ニ以上云フ處ノ大意ヲ以テ腹心ヲ開キ國中ノ財ヲ出セシ富民ヲ諭シ年限ヲ定テ其間ハ全ク借り居ヘヲキ以後一切新借ヲナサス租入ヲ以テ國家一歳ノ用度ヲ制シ所謂ル量入為出ノ政ヲ是ニ於テ行ヒ猶其上ニ縮衣節食シ玉ヒ又ハ諸官ノ用ヲ減シラレタル羸餘ヲ以テ邦外ノ財主ニ少シクハナリトモ信ヲ失ハサルヨウニ返シ與ヘ然シテ國用充實ノ後ニ至リ大ニ倉ヲ開テ借ヲ贖償ヒ大信ヲ立テラル、シ外出スヘキノ道ヲキニ決シ玉ヒ

去レ臣國內ノ民ニテ公上ヘ金ヲ納レ用ニ給スル程ノモノハ皆其父祖父又ハ其身ニモ艱難困苦シテ寸積銖累ニテコソ巨万ノ産ヲモ致セシニテ其力ニ頼リ是迄國事ヲ急ヲモ辨セシモノナルヲ唯今ハ國ヲ為メ不得已トハレヒナカラ領主ノ身トメコレヲ借り居ルト左コソ彼輩難義スヘシト察シ玉ヒ寢食ヲモ安シ玉ハス然リトイヘ臣此儘ニシテ因循苟且セラルレハ一國數十万人ノ難義ニ及フトナレハ万人ノ難義ヨリハ寧ロ千人ニ難義

セシメ千人ノ難義ハ寧ロ百人ニ難義セシメ
ントノ意ニ思召定メラル、ノヨシ書キ綴ラ
セラレ則今年乙巳ヨリ五年ノ間借居ヘラル
、ノ旨國老有馬播磨泰賢ヲシテ國內ノ富人
ヲ諭サシメラル其上ニモ參政計吏等ヲシテ
猶又委曲ニ上意ヲ通セシメラルケルニソ誰
カハ命ヲ奉セサラン儲其上ニテ參政ノ内不
破孫市ヲシテ浪華ニ到リ以上ノ意ヲ以テ豪
商等ニ談セシメラル且糶米ノ事ヲ周旋スヘ
キヨシヲモ命シ玉ヒケルニ坂商等モ皆凡公

ノ心ヲ苦メ玉フト其辭ノ不得已トニ服シテ
盡ク命ヲ奉シケル是固ヨリ理ノ明ト事ノ正
トニヨルトハイヒナカラ公ノ茹^レ淡^ク攻^ム苦^シ
玉ヒテ衣服飲食下モ庶人ト比シ玉フ御誠心
ノ感應ニヨレルニ非スニハカ、ル難事ノイ
カテ如何^ニ行ハルヘキヤ此議起リシコロハ
公ノ御病ヒモ中頃痊ヘ玉ヒシ時ナリケレト
此事ノ行ハル、ニ當リテハ更ニ御心ヲ勞シ
給ヒシヨリ又御病勢ヲ加ヘラレケルコソ是
非モナク又恐多キ事ニテアリシナリ此事既

二行ハレテヨリ國計ノ定準磐石ノ如ク定リ
万事コレヨリニテ緒ニツクテ得タリ
定メ玉ヒテ翌年ニ至リ世ヲ去ラセ玉フテ
今公立タセ玉ヒケルニ即チ幕府ヨリテ
君下嫁セラレハ命アリテ宮掖ノ造營万事
ノ費用奉テ數ヘカクサレレ今公先公
ノ遺志ヲ継述シ玉ヒ諸有司モ其意ニ本ツキ
盡カ勤勞セシホトニ令公襲封シ玉ヒヨ
リ大事ヲ成ルニ至ルマテ一錢ヲモ借ラスシ
テ事ヲ辨スルヲ得今ニ至テ儼然タルナリ
從前幕府ヨリ姫君下嫁セラレシ家ニハ
是カ為ニ財用窮迫シ國民ニ厚歛シ或ハ士俸ヲ
減撥シ甚シキモノハ國民蜂起ニ至リシ國モ
アルヨシ我藩ニ於テハ如此ナルハ固リ
幕府ノ崇徳シ玉フノ澤ニ浴スルハイヒナ
カヲ賢ニ先公ノ遺澤ト今公英意トハ
皆難有テニ臣子ノ一日
モ忘ルヘカテサルナリ

一 槍ハ鞘ニ納リ弓ハ袋ニ藏レリ目出度御代ノ
習ニテ武備日々疎ナルト世上ノ通弊ナリ
大良公ノ末年已ニ心ヲ用ヒ玉ヒ人馬操練ノ
事ヲモ命セラレケルニ公ニハ無々別ニテ
武ヲ好ミ玉ヒテ前條ニ出シ如ク襲封ノ始ニ
夷船渡来ノ事ニ奮起シ玉ヒテヨリ殊ニ兵制
ニ心ヲ用ヒサセラレ鈴韜ニ精シキモノニ命
シテ武備ヲ講セシメラル其大要ハ我藩中
古ニ擢用アリシ兵家者ノ定メ置キタル法制
アレ氏皆國力ヲ量ラス侈大ニシテ衆多ナル

ヲ崇ミ太平ノ美觀ニテ實用ニハ行ヒカタカ
 ルヘキ事モ多カリケレハ公其弊ヲ矯メ玉
 ヒ簡易ニシテ速ニ辨スヘク精銳ニシテ煩雜
 ナラサルヲ主トシ無益ノ從卒役夫等ノ饋糧
 ヲ靡スルヲ減シ美麗ヲ主トシテ財用ヲ費シ
 實用ニ遠キ器械等ヲ省キ玉フ所謂兵貴精而
 不貴多ノ意ヲ思召ミテノ御事ナリ島田丹右
 衛門淡河次郎左衛門山田猶三郎杉山八左衛
 門等皆軍制ノ事ヲ掌リテ取調シテ義敬謹
 ルニ本藩ノ兵制國初ノ頃迄ハ蓋シ何流ナト
 ト定リタルハ勿論ナカリシト也靈源公

ノ御幼少ノ頃長沼澹齋宗敬保傳ノ職ニアリ
 シトカ聞ユレ氏靈源公モ世ヲ早フシ玉
 ヒシニヨリ澹齋モ即致仕シテ長沼流ノ兵學
 モ固ヨリ絶テ無シ其後越後流ノ兵制ハ越後流ト
 玉ヒシ君アリテヨリ我藩ノ兵制ハ越後流ト
 定マリ殊ニ大慈公深ク其流ヲ究メ玉ヒ遂
 ニ御流義トサヘ云ハ越後流ノ一ト人皆思
 ヘリ既ニ毎年正月元日ノ御規式ニモ第一ニ
 先ツ三軸御拜トテ謙信ノ画像并ニ越後流極
 意掛物金ニテ冥ノ字ヲ書タル物ナシトテ元
 日ノ初礼ニ拜シ玉ヒシトナリシ也其三軸ハ
 秘物ニテ近臣モ輒スクルハ方今兵學者流ノ
 越後甲州北條道灌ナルハ方今兵學者流ノ
 立テシ者世ニ多ケレ氏皆是後世ノ杜撰ニ出
 テ真ニ其流祖ノ名將ヨリ傳ハリタル者ニ非
 ルハ勿論ナリ夫ヲカク尊信セシテ元正月
 リトテ襲封ノ翼春位ヲ正シ玉フ元正月
 ヲリトテ襲封ノ翼春位ヲ正シ玉フ元正月
 ニハ其カハリニ伊勢大神宮ト祖宗ノ神主ヲ

第一ニ拜シ玉フ規式ヲ起シ玉ヒ入封ノ後チ
此ノ兵制ヲ改メ玉フ事モ退テハ國カヲ量リ
時勢ニ叶ヒ古今ノ精英和漢ノ骨髓ヲ集メテ
妙用神通別ニ一機軸ヲ出シテ本藩ノ兵制ヲ
定メ玉フ御深意ニテ有シカ暫ク今迄ノ制ニ
隨ヒ玉ヒ先ツ此本文ノヨリ初メ玉ヒシト
ソ故親軍ノ訓練當法ニ至テハ所謂越後派ニ
テハ非ルトナリ此ノ兵制ノ條ニ預ルナレ
ハ此所ニ注スト云ヘトモ元日ノ礼ヲ改
メ玉フトハ人君初ラ正スノ大本ト云ヘシ

一從來軍馬訓練ノ事アリトイヘ凡皆前軍ノ諸
隊ニ止リ御旗本ノ備ヘニ至リテハ絶テ久シ
ク操練ナカリシヲ公仰セニ前軍固ヨリ強
カラサルヘカラスサレ凡予カ親軍ニ至リテ
ハ愈以テ精銳堅固ナラスンハアルヘカラス

然ルヲ親軍ノ訓練ヲ廢スルハ謂レナキナ
ラスヤト宣ヒ此度ハ最モ御旗本ノ備ヘヲ調
練セラレ藩中諸士ノ子弟強壯ニシテ刀槍弓
砲ノ技ノ精絶ナルモノ一百人精選シ玉ヒ近
侍槍組五十騎同射手二十騎同銃手三十騎ヲ
新ニ立テ玉ヒテ隊長ニハ武技ノ師範役或ハ
老功ニテ武藝ニ鍛鍊セシ輩ヲ選ミテ命セラ
レコレヲ親軍ニ加ヘラル

一兵馬訓練ノ場所從前ヨリコレ有下イヘ凡其
地狹隘ニシテ諸隊ヲ容ルナ能ハス一隊毎ニ

切リテ教習セシナリニ公入封シ玉ヒ
テヨリ命シテ新ニ外郭小松原ノ西南ナル松
頭トイヘル地ヲ相セシメラレ陣小屋ヲ建地
ヲ卒ケコレヲ調練ノ地ト定メ玉ヒケル是ヨ
リ前軍及ヒ諸隊ヲ容レ御旗本ヲモ一齊ニ容
ルテ得テ全軍ノ教習モ行ハル事ト決テ
リ又蘇ハ精熟ナリ一官ハ精熟ニ玉ヒ主
一近世ニ至リテ世界万国ヲ通シテ火技日々精
絶ニナリテ西洋ヨリ追々利器妙術ヲ傳ヘ来
リ海内此技ヲ熟講スルノ國多シ是夷船来侵

ヲ禦カンニハ此器ノ妙モ其利多キヲ以テナ
リ公ニモ深ク此事ニ意ヲ注キ玉ヒ已ニ江
戸ニテ襲封シ玉ヒ頃御旗本下曾根金三郎
殿ノ西洋傳來ノ砲術ニ精シキヲ聞キ玉ヒ家
臣吉見七次郎吉村多門カ曾テ火技ニ長セル
ヲ以テ此二人ニ命セラレ下曾根氏ニ就テ業
ヲ受ケシメラレシニ二人モ勉強ニテ速ニ其
妙ヲ究メケレハ公入封ノ後チ此二人及ヒ
淡河次郎左衛門是ハ素ヨリ久留米ニ在リシ
カ近國ニ師ヲ求メ西洋派ノ
火術ヲ究ニ就テ此技ヲ學フヘキ旨諸士ニ令
メ居レリ

セラレシナリ又江戸ニテ鍛工ヲ情ヒ「ホウイ
ツスル」モルチイル等西洋製ノ炮ヲ鑄造セシ
メラレコレヲモ國へ下シ玉ヒ且鍛工匠人等
ヲモ江戸ヨリ連レ歸リ玉ヒ城東柳原ノ地ニ
テ右ノ諸炮ヲ鑄立サセ玉フテ數多ニテ車臺
仕掛等ヲモ造ラセ玉ヒケリ
一奪情起復ノ事ハ古ヨリ論モアルナレモ我
藩ニ於テモ古來行ハレ來リ要路ノ職ニ居ル
人ハイフニ及ハス近習ノ臣或ハ小吏ニテモ
日々勤ルモノナト其人出サレハ公事ノ滯リ

ニモナルヘキハ國制ノ忌ミ未タ明ケストイ
ヘ氏出勤ヲ命セラルルナリ然ルニ風俗日
々偷ク奪情セラルルヲ以テ榮トスルノ惡風
起リ差タル公事ノ滯リニモ及ハストイヘ氏
日勤ノ役ヲ勤ムル者喪ニ遇フナレハ一七
日ヲ過ヌル頃同僚ヨリ何某出勤仰セ付ラレ
タキ由申出レハ例ニ據リテ即チ命セラルル
ナレリ公其弊風ヲ察シ玉ヒ元來國制
ノ喪スラ孝子仁人ノ心ニテハ短ク思ヒナカ
ラ俯テ制ニ就クニテコソアルヘキヲ親喪ヲ

奪ハルヲ以テ榮トスルニ至リテハ人ヲソ
孝愛ノ心偷スカラシメ政體風俗ニ害アルコ
ノ甚シキニ至ルヘシトテ一切奪情起復ヲ
止メラレ親喪ハ云フニ及ハズ諸父母昆弟其
外共ニ苟モ喪ニ遇ヘルモノ皆國制ノ忌ヲ全
ク受ルコトニハナリ又是偏ニ衰俗ヲシテ倫理
ヲ重ニシ民心ヲ厚カラシメントノ御心ナリ
尤其人アラサレハ實ニ公事ニ滯リヲ生スヘ
キモノナキニモアラサレハ是等ハ別ニ法制
ヲ定メラルヘキ思召アリテ有馬播磨泰賢ヲ

以テ村上守太郎ト予トニ命セラレ古礼ナト
取調サセラレシカト程ナク大故ニ及ハセ玉
ヒテ其制ハ終ニ定マラサリシナリ
一 昊天ノ我 藩ニ於ルヤ幸ヒニ間世特出ノ君
ヲ出シテ又忽チニ奪ヒ去ル彼蒼ノ心コソ疑
シケレ 公元來格別ノ強質ニハアラセサリ
シカト世子ニテアラセラレシ頃ハ左マテ病
ニ玉ヘルコトモアラサリシニ襲封シ玉ヒテ數
月ナラスシテ便チ病ヲ得サセラレ終ニ享國
僅ニ三年ニシテ世ヲ早シ玉フコソ悲シケレ

甲辰ノ歳八九月ノ頃ニヤ有ケン襲封ノ後久
々ニテ槍法ヲ演セラレシニ誤テ腰ヲ少シク
撲チ玉ヲ夫ヨリ暫シテ溺ノ赤キヲ覺ヘ玉ヒ
侍醫輩ヲシテ拜診セシメラレ服藥シ玉ヒケ
ルニ幾程ナクシテ常ニ復レ玉ヒタリ然ルニ
又十月頃ニヤ有ケン責馬ヲナシ玉ヒタルニ
溺色又赤キヲ帶フ於是侍醫又藥ヲ上リ此度
ハ武技ヲ演シ玉フヲ堅ク禁シ奉リ公モ
深ク慎ミ玉ヒカクテ又四十五日ヲ経タリケ
レハ又常ニ復リ玉ヘリ然ルニ乙巳ノ歳正月

廿四日青山ノ大火ニテ前ニ記セシ如ク殊ニ
身神ヲ勞サセ玉ヒケルニヨリテ溺血又起ラ
セ玉フコノ度ハ侍醫モ猶更心ヲ盡シ藥ヲ上
リシカト速ニモ止ミ玉ハス四月發軔ノ前ニ
至リテ其色薄キヲ得玉フ官醫多紀樂真院老
ニモ診セラレシカト此御病急症ニアラス御
心長ク治療ヲ加ヘ玉フヘシナト申サレシノ
ミニテ差タルトモナク己ニ幕府ヨリ入封
ノ暇モ賜リケレハ公固ヨリ歸藩ヲ急キ玉
ヒ侍醫輩モ亦路次ノ慮ヲ陳スル者ナカリケ

レハ其儘ニ江戸ヲ發セラレケルニ輿中ニヤ
障リ玉ヒケニ箱根ノ巔ニ宿シ玉フ夜ヨリ溺
血又甚シクナラセラレ其後日々ニ赤色ヲマ
シ侍醫モ頗ル憂ヒケルニソ供奉ノ老臣有馬
織部參政馬淵貢等甚々憂慮シ奉リ驛路ヨリ
書ヲ發シテ京師邸吏ヘ言コシ京都ノ名醫禁
裡御醫典藥少屬百々陸奥守市中ニテ蘭方ニ
名高キ小石拙翁ヲ伏見ノ御館マテ招カルヘ
キノヨシ命セラレ五月九日伏見ニ著セ玉ヒ
即日陸奥守ハ來診シ拙翁ハ老病ヲ以テ辭シ

同學日野鼎哉ナル者ヲ薦ム然レモ強テ拙翁
ヲ招キ玉ヒ度ム子使者ヲ以テ仰セコサレ此御
使者ハ余コレニヨツテ同十日拙翁モ來リ鼎
勤メタリ哉モ來リ診シ奉リシニ三醫共ニ少々ノ不同
アリトイヘモ皆非常ノ御大病ノヨシ申ケレ
ハ公ニモ痛ク驚キ玉ヒ國老ヲ始メ群臣ハ
云モサラナリ如何ハセント憂慮シ三醫ノ内
ニモ拙翁ヲ米府マテ招キ玉ヒ然ルヘシト侍
醫松下養安北村文周申シ上公ニモ拙翁ヲ
信シ玉ヒケレハ即チ又京都ヘ御使者ヲ以テ

御頼ミアリシニ此時モ余供奉ヲ許サレテ拙拙翁方へ御使者勤メタリ拙
翁モ命ヲ受テ馳至リ播州片島ニテ追付奉リ
直ニ驛路ニ從テ日々拜診シ藥ヲ上レリ然ル
ニ伏見へ著セ玉ヒシ頃ヨリ溺血ノ赤キヲ純
血カト疑ハル、ハカリニテ或ハ紫黑色ヲ帶
シテモアリ六月七日米城ニ入ラセ玉ヒテヨ
リ七月初マテハ同シサマニテ在セラレシ處
七月中旬ニ至テ御病愈甚シク眩倒シ玉ヒシ
ヲアルニ至レリ拙翁モ種々工夫ヲナシ藥ヲ
上リ待醫亦カラ盡シテコレヲ助クルトイヘ

氏効ヲ見スコ、ニオキテ老臣等相計リ急キ

戸田熊次郎御目附役ヲ使トシ京ニ登ラシメ百々

陸奥守ヲ招カシム然ルニ八月初ニ至リ溺血

薄クナラセラレ中秋ニ至リテ始清水ノ如ク

ナリテ夫ヨリ日ヲ退テ御快クアラセラレ

公モ喜玉ヒ羣臣ノ悦ヒ大方ナラス拙翁モ始

テ安堵ノ思ヒヨナセリ東邸ニテ夫人及松濤

院殿 公ノ驛路ヨリ御病狀ヲ聞キ玉ヒ深ク

憂ヒ玉フヨシ聞ヘケレハ此時ニ至リ右ノ如

ク快クアラセラレ、ヨシ申上ノ為メ伊福小

右衛門御納戸役ヲ江戸へ登セラレ九月初ニ至リ
百々陸奥守来著シ拙翁ハ暇ヲ賜リテ京へ歸
レリコレヨリ漸々ニ快クナラセラレ十月ニ
至リテ陸奥守モ京ニ歸ラル然ル二十一月ニ
至リテ又赤溺ニナラセラレ十二月初ニ至リ
テハ其赤色又六七月ノ際ノ如シ此度ハ肥後
熊本ナル細川家ノ老醫田中元勝ヲ招キ玉フ
此御使ハ村上守太郎勤メタリ御舊制即チ元
勝来リテ拜診シ藥ヲ上リ旬日ハカリニテ歸
リケルニ迄國ノ事ナレハ翼丙午年正月四日
年ノ春モ又来レリ

ニ至リテ溺血又清ニ給フコレヨリ春暖ヲ追
テ快クナラセラレ二月ノ中旬ニ至リテハ始
テ二ノ丸御殿へ入ラセラル三月初ニ至リテ
ハ柳原ノ別亭ニモ入ラセ玉フ愈以御氣色御
快然トアラセラル此ヨリ度々二ノ丸又ハ柳原
へモ入ラセラレ三月十七日ニ至リ去年七月
以来始浴シ玉ヘリ去冬御再發ヨリ以後東邸
ニテ又々深ク御憂慮アラセラル、ヨシ聞へ
ケレハ此度右ノ如ク御快然ノム子申上ノ為
メ予ニ命シテ江戸ニ登ラシメラル予此月ノ
初メ舊制

認書ノ撰畢リテ今公ノ公子ニテアラセ玉
セシ傳職ヲ命セラレ且此事ノ命ヲ受テ東歸
即チ十八日ニ米府ヲ發シ四月十七日江戸ニ
著シ夫ヨリ夫人及ヒ松濤院殿へ謁シテ
公御病中ノ事此度快クアラセ玉フ始終ヲ詳
ラカニ申上ニ悦ヒ玉フ大方ナラサリシ
カト即令ニシテ回思スレハ南柯ノ一夢トナ
ケルニ其後益快クナラセ玉ヒ表へ出御ニテ諸
士朔望ノ朝ヲ受ケサセ玉ヒ端午ノ日ニハ筑
後河ニ舟遊シ玉フ然ルニ梅雨後ニ至リ暑氣
強クナリケルニ少シク困ミ玉ヒ溺中又濁色
ヲ生セラレ六月央ニ至リ次第ニ御氣分閉チ
サセラレ御食氣モアラセラレス益衰弱シ玉

ヒケレハ侍醫ノ輩モ大ニ驚キ種々ノ心ヲ盡
シテ藥ヲ上リ諸老臣等モ一方ナラス憂苦シ
急キ小森田甚三郎御目附役ヲシテ上京セシメ百
々陸奥守ヲ招カシメ古莊忠吾惣奉行ヲシテ
伊大廟勢ヲ祈ラシメ武藤彌兵衛奥右筆ヲシテ讚
岐ノ金毘羅神ヲ祈ラシム然レヒ六月末ニ至
リテ御病勢愈危篤ニ至ラセラレ大小ノ臣僚
内外ノ士庶其憂ヒ中々言語ノ盡スヘキニア
ラス急キ古田廉太郎御納戸役ヲシテ肥後ニ趣キ
田中元勝及ヒ黄玄朴トイヘル名醫ヲ招カセ

ラル玄朴ハ速ニ来リテ診シ奉リシニ七月三日申ノ刻玄朴拜診シ御舌ヲ示サセ玉フ時ニ少シク御顔色替ラセラレ玄朴次ノ御間ニ退キシニ頓ニ御容子變セラレ終ニ大故ニ及ハセ玉ヒケルコソ悲シケレ此日夕刻元勝来著本^{幼切}汁トカイヘルモ来リ皆己ニ城ヲ登ラントシケレ氏事ニ後レテ拜診ニ及ハサリシナリ百々陸奥守モ大坂マテ下リテ大故ヲ聞キ遂ニ帰京セラレ忠吾甚三郎弥兵衛等モ皆空ク帰鳴呼此君ニシテ此ニ至ラセ玉フ天

道是邪非邪卜國中士庶販夫賤隸ニ至ルマテ悲痛慟哭セサルモノコソ無カリケル

一 公已ニ病ヲ得玉ヒ伏見ノ驛館ニテ京師諸名醫ノ拜診シ奉リテ後ハ愈深ク遺體ヲ重ニシ玉ヒ小石拙翁来リテ後ハ飲食ノ節ヲ嚴ニ申上又起居動止殊ニ慎重ニシ玉フヘキヨシ陳シケルニ皆堅ク守ラセ玉ヒ乙巳六月ヨリ丙午二月マテハ正寢ニノミ起卧シ玉ヒ僅ニ數歩ナル次ノ御間へ入ラセラルニモ至テ徐ニ歩シ玉ヒ殆ント周歲ニ近シトイヘ氏少シモ退屈シ玉ハス御慎ノ深キヲ近臣ハ云ニ及ハス京師ノ醫人モ實ニ感服シ奉レリ貴人ノ

病ニカク醫ノ言ヲ守ラセ玉フヲ希代ノ君ニ
テアラセラル此君ニテ病ノ痊ヘ玉ハヌテ誠
ニ恐入タル御事ナリト小石拙翁モ垂涙ニテ
度々言ヘリ然レモ公國政ノ議ニ至リテハ
深ク御心ニ懸ケサセラレ御病牀ニ奮起シ玉
フテ數度ニテアリシナリサレハ儉令理材武
備等ノ事皆御病間ノ事業ニテ已ニ境内ニ浹
洽シ他邦ニ傳播スルニ至リシカトモ御心ニ
ハ猶蘊蓄ノアラセラレナカラ御病ニテ任セ
玉ハヌテテ歎キ玉セテノ御作ニ

述懷

臥牀過七月日夜擁孤衾每懷安民業却愧
待我深勤邦思盡力阻病不隨心人勸痊從
事憂情猶塞襟
此御作ニテ御心ノ中ヲ推量シ奉レハ忽チ淚
隕チ胸塞リ復讀ムテアタハサルナリ嗚呼我
國家ノ臣子タラシモノ數世ノ後ハテモ此詩
ヲ讀テ淚ヲ落サ、ルモノハ其人必不忠ニテ
天ノ眞罰逃ルヘカラサラニトコソ思ハル、
一 公東邸ニテ儉令ヲ下シ玉ヒシ時宮妾ヲ退ケ

京ニ歸シ玉ヒシニ入封ノ時ニ至リ夫人ヨリ
御在國ノ間ニハ是非共御召仕ノ女中ヲ名抱
ラレ玉フヘキヨシ申サセ玉ヒケレ臣公仰
ニハ多クノ家臣等東邸ニ祇役スルモノ皆一
年二年或ハ三五年モ妻子ノ養ヲ受ケス艱苦
獨居スルヲナリ予已ニ何事モ儉約ヲ守リ士
臣ト苦ヲ同フスルノ志ナレハ僅カ在國一年
ノ間側ニ婦女ナシトテ何カ苦シカルヘキ在
國ノ時ニ名抱ルホトナラハ何ソ必シモ去年
故ラニ退クルヲラセニヤト宣ヒテ終ニ置セ

玉ハサリキサレハ公米城ニテ長ク病ニ卧
シ玉ヒ大故ニ及ハセ玉フニ至ルマテ婦女一
人モ侍ラス薨于路寢不死婦人之手古語ニモ
愧チ玉ハサルト公ノ如キノ君ハ澆季ノ王
公大人ニ求メハ恐クハ類ヒ少ナカルヘシト
コソ思ヒ奉ル
一 德之流行速乎置郵而傳命ノ聖語ニ違ハス
公ノ愛士恤民ノ御誠心ハ速ニ四境ノ内ニ流
行シケレハ國內士民ノ公ヲ戴ク亦實ニ
天地ノ如シ己ニ入封ノ歲秋冬ノ交ヨリシテ

民間所々ニテ殿様祭リトイヘルヲ始メ
民家相會シテ尊位ヲ設ケ酒食ヲ献シ万歳ヲ
祝シ奉レリ古ノ所謂生祀トイヘルモ亦此類
ノ心ナルヘキカ御病重カラセ給フニ至リテ
ハ國ノ鎮守タル高良山玉垂宮ヲ始トシテ諸
寺諸社へ歩ヲ運ビ灌氷潔身シテ御平愈ヲ祈
ルモノ諸士ノ内ニモ少カラス民間ニテ氏神
等へ祈願ヲ立テシモノ枚擧スヘカラストナ
ニ御大故ニ及ハセラレ九月廿二日御葬式ノ
時ニ至リテハ大手御門ノ前ヨリ京ノ隈ノ口

ニ入ラセ玉フ御道ヲ一條明ケタルノミニテ
筑島町ノ角ヨリ兩替町通り雁塚ノ御門マテ
サシモ廣キ空地ナルヲ櫻ノ馬場ノ中御堀ノ
岸マテモ草トモイワス石トモイワス立錐ノ
地モナク國中ノ民庶集リ出テ拜シ奉リ或ハ
合掌念佛シ或ハ靈柩ニ向ヒテ賽錢ヲ擲チ拜
シ奉ル輩モアリシナリ民ノ公ヲ慕ヒ奉ル
如此ナルニ公ノ壽ヲ得玉ハヌハ天視從吾
民視天聽從吾民聽ノ古語モ虚語ナランカト
疑ハルハカリニソ覺ユレ公大漸ニ及ハ
セラレシカハ公

猶哀慕ニ堪ヘス竊ニ供養回向等ヲ申上シ
幾ハクヲ知ラレサレナリ其間ニ余カ聞トコ
口ノ福寺トイウケニ此年ノ十月廿六日榎津
町光福寺トイウケニ此年ノ十月廿六日榎津
後御守様仏果為ト奉書一枚紙ニ認メタル書
付一ツ者馬ノ者ハ有ト云字ノ誤リナルハシ
金一兩入リタル封一ツ御仏米龍ト認メ内ニ
銀三文入リタル封一ツ御仏米龍ト認メ内ニ
内ニ銀三文入リタル封一ツ御仏米龍ト認メ内ニ
包ニ臘燭一斤此等ノ物何某ト云名ヲ隱シテ
有リケルヲ見付タリ其村ニ尋ケレトモ何某
ト云テ知ラス又翼未年三月二日上妻郡藤田
村光泉寺ト云テ又翼未年三月二日上妻郡藤田
今般義源院様御法事ニ付乍恐為御供養御
寺納仕候以上村中ト認メ置タルアリ是又何
夕ルヲ知ルヘカス民ノ置タル思フテ所謂於
戲前王不忘れト云フノ類ナリ當時或人豊後國
日田市京屋作兵衛ト云者ノ當所ヘ往キニ者
アリシニ坐屋作兵衛ト云者ノ當所ヘ往キニ者
兵衛公恤民ノ意ニ感シ喋々稱シテ止ワサ

子淵孝五郎君愈御養子ト定メ玉ト即チ參政
馬ヶ淵貢東郎ニ馳セ登リテ此旨ヲ公子ヘ申
上ケレハ此ニ才斗テアセ玉御家督ニ立チ玉
フ即チ職ヲ切セシカハ今ヨリ此時予立チ公
ノ禮ノ御使者且ツカハ今ヨリ此時予立チ公
及ヒ公ノ方ノ内々ノ御代香ヲ始メ奉リ命セラ
且ツ公ノ方ノ内々ノ御代香ヲ始メ奉リ命セラ
命ヲ蒙リ且又御葬儀ヲ拜見シ東歸ニテ申内
靈柩ハ納メテ又御葬儀ヲ拜見シ東歸ニテ申内
上クハ九月七日久留米ヘ著シ八月十日江戶
ヲ發シ勤メ九月七日久留米ヘ著シ八月十日江戶
用ヲ勤メ九月七日久留米ヘ著シ八月十日江戶
廿二日午時靈柩ヲ出テ諸式アリテ後御墓所
林寺ニ達セテ埋事畢リテ諸式アリテ後御墓所
ニ移シ奉リ藏ルカクテ四日ノ後御墓所
ニ發シテ十月十日東邸ニ著テ反命ニケル
ヲ發シテ十月十日東邸ニ著テ反命ニケル
ルナリ深シ敬謹テ按スルニ公去リ玉ヒシノ心ニ入

ルトナリ隣國ノ民スラ如此ナレハ親ニク其
澤ヲ蒙ムル者ノ公ヲ思フヲ知ルヘキナリ
嗚呼痛哉々々此ヲ思
テ慘歎ニ堪サルナリ

一 愚賤ノ臣子ニテ賢明ノ君上ヲ許シ奉ル

儲妄不敬ノ罪其恐レ少ナカラストイヘ氏竊

ニ 公ノ平生ヲ通觀シ奉ルニ忠孝ノ心仁愛

ノ誠寛大ノ量温厚ノ質果斷ノ識皆コレヲ天

性ニ得玉ヒ加ルニ讀書力學ノ功ヲ以テセラ

レシカハ其日用躬行ノ實發政施事ノ際皆經

傳ノ神髓ヲ會得シ子史ノ膏味ヲ咀嚼シ玉ヒ

テ御胸中ニ融解渾化シテコレヲ運出出シ玉

フ丁實ニ出類超凡ト申ニ奉ルヘシ然レ氏前

ノ條々ニ出セシ如ク御幼少ヨリ父君ヘ事ヘ

玉フニ御餘暇アラセ玉ハサリシカハ讀書ノ

業志ニ玉ヘル程ニハナシ玉フヲ能ハス詞章

ノ藝ハ好ミ玉ヘル程ニハ學ヒ玉フヲ能ハセ

玉ハス讀書ノ力モ又實用ノ自得ニ玉ヘルニ

ハ及ハセ玉ハサリシヤト思ヒ奉ル夫レ世上

ノ人貴賤上下共ニ學ヲ好ムト稱スルモノ多

シサレ氏詞章ハ一時ヲ動カストイヘ氏讀書

ノ力コレニ副ニ足ラス讀書ハ萬卷ヲ破ルト

イハ臣躬行事業ハ却テ無學ノ人ニ及ハサル
モノ溜々トシ皆是ナリ唯我公ニ於テハ是ニ
反シサセ玉フテ如此ナルハ實ニ天質ノ美立
志ノ篤想見シ奉ルヘシ公ニシテ天是ニ年
ヲ假シ益學ヲカメ行ヲ砥キ精ヲ励マシ治ヲ
圖リ玉フテ志ヲ逞フセラレ是ニ加ルニ大賢
豪傑ノ佐ヲ得玉ヒ數十年ノ功ヲ積ニ玉ヒ
其德業治績ノ隆ナルヲ一時列國ニ模範トシ
テ天下萬世ノ師法トモナリ玉ハシテ難カル
コシトコト思ヒ奉ル嗚呼惜ニ奉ラサル

ニヤ悲ニ奉ラサルヘテニヤ
義源公墓誌
維弘化三年秋七月三日筑後國久留米城主
有馬公疾薨於國城正寢政事之臣以狀令臣量
弘作誌臣謹按狀公姓源出自村上帝初族
赤松氏至義祐君食邑攝津有馬因為有馬氏八
世至梅林公梅林公之子春林公始封
久留米茅土相承以至公十世々候久留米二
十一万石矣公諱賴永小名彌作字君成大
良公之第四子也大良公正嫡知光夫人德

川氏無子庶子長曰千代丸君天次曰仙太郎
君一智光夫人養為己子立為世子是為大林
世子亦天其次曰榮次郎君亦天其次即公
也所生田中氏以文政五年三月廿三日生于久
留米大林世子既喪大良公乃立公為世
子往居江戸邸天保五年九月始朝見幕府十
二月叙從四位下任侍從為上總介我藩儲君叙
任同時始於大良公而公亦繼焉十二年以
世子代大良公就國大良公有疾請使之也
弘化元年四月大良公薨于江戸邸六月襲封

七月為筑後守是歲陞所生田中氏準公族食祿
七百石二年春修江戸城前年災故也公請納
金供其費聽之故事幕府有興作納財助功必
徵賦國中至是公以比年民貧特命免之夏就
國自春林公以來世居內城至大慈公始構
館于其下而遷焉至公復居內城三年三月賜
鶴于國我藩賜鶴之典肇于大慈公然自非為
少將例不得賜及大良公幕府褒其勤勞許
世賜鶴于國不論官位至是乃有此賜非為少將
而賜鶴于國公為始初公就國有疾踰年不

復常是歲夏例當東觀告疾留國歷暑漸劇醫藥
無驗禱祀無應遂至不起年二十有五謚法曰
義源院仁峯道崇大居士葬久留米梅林寺先塋
之次公聰明仁厚識慮深遠篤恭以修己英果
以行事而純孝至性其事大良公婉容愉色先
意承顏一事之微必咨稟而後行至於起居寒暖
之節悉心用意纖細不遺及大良公得病公
晝夜看護親侍湯藥衣不解帶及遭大故哀毀踰
節時月既移而悲慕不已日謁時祭事亡如存
公之篤孝如此其至也其接兄弟以及親族恩義

兼盡者皆自其孝推之至于勉學修德以施於國
者莫不本於孝矣其勉學也為世子時侍養甚勤
而讀書不懈學務實用不事浮誇先躬行講治要
而於倫理名分之際尤致意焉旁喜詞藝且好武
技尤長於擊劍騎馬資性澹泊絕無聲色之好內
行之潔未有倫比明於知人推誠任使愛直惡諛
虛己求言論諫雖激假借納用御下慈惠善體其
情是以人心感奮思諭其誠焉公以世子久在
江戶與肥前侯齊正土佐侯豐熙秋月侯長元以
道義交雖離在各國往復不絕又與薩摩世子齊

彬尤親善及公名益著大小諸侯亦多推其賢者我藩自始封至是二百餘年治平既久紀綱不能無少弛漸趨罷弊公承其後以一新邦家為己任自其襲封於江戶邠赫然奮其剴明之威總攬政權黜陟幽明日親聽斷勵精乎政術及就國專於養疾不能臨政然常召見政事之臣圖治之意甚勤其為政承俗奢財匱之餘首行大儉以身先一國常服綿衣夫人服飾莫不敦朴嚴禁華侈抑末厚本以復國力且經理國用裁減浮費量入為出之制由是而定矣大開言路使國人雖至

賤得以上書言事又甚重武備以頻年夷舶出沒西海深為之慮更定軍制主簡易以適實用其為治之要則務振政綱敦風教擇才而任焉享國纔三年卧病居其半而於其間能除弊布澤培固根本者功在宗社澤施生民可謂隆矣國人感其恩至有生而祀之者至其病也士民私禱祀者不可勝計及薨雖田野蠢氓莫不奔走悲號焉公之治國本於大孝而期於事上之忠欲恢祖宗之業以全藩屏之職其所蘊蓄非尋常所能測矣使天假之年則成就中興之業將有出乎古今良

主之右者矣夫何不幸壽止於此是豈一國之人
一時悲之而已天下後世必有傳而惜之者矣
夫人島津氏初大良公為上公聘加賀侯齊廣
女未婚而喪乃娶薩摩侯齊興所養女實齊興父
齊宣女也是為夫人無子公之就國也上書
豫請若病終於國得立弟為賴多君臨終請遂立
為嗣云云其半而後其間非無事也其間
臣村上量弘謹誌
穆乃我上公敬明厥德乃維何至孝純一篤行

力學高志遠識充積洋溢以及於國初居儲宮小
心翼々監撫就藩韜晦慎默仰望厥容淵乎有憶
匪營匪求人心乃服爰及襲封誕修天職乃攬權
綱英威挺恃審其幽明或黜或陟處置當宜莫有
反側襲封之月崎尹相告遣海風腥有蠢啖咭
公在江邨聞變不惑下令躬儉遙動國俗踰歲就
藩將伸所蓄天道無知乃有斯疾保護遺體凜如
捧玉國事之來奮起於蓐點檢文書召見輔弼往
復論究動至日昃一人之勞万人之福公未享
報勤瘁而沒其所施為去華務實通壅恤隱抑末

力穡經理國用莫不周密修明武備省其虛飾其
既行者在民耳目其未行者孰能擬測且厥平常
敦倫節欲信愛忠賢容納讜直厥德厥政原本經
術志可不繼事可不述國家萬世守之不忒推而
大之公志乃畢公雖既沒神扶社稷牖我君
心懲我民蠹凡百臣子勿怠勿逸英靈在天降監
惟速徵臣作誌貞石斯勒石不待勒金不待刻
公德為度公治為則千秋萬祀曷其有極

我義源公之薨也諸老臣議令臣量弘作
誌臣素乏詞藻加以驚痛之餘神思荒迷紬

繹公之平常則益悲慘哽咽筆不忍下也
葬期既迫纔能錄其行事而銘卒不成且謂
乘良二公皆有誌無銘今而踰其父祖或者
公盛德之所謙讓不居也既而思之則誌之
所不能悉有不可已於銘者業已竣事不可
追書私欲屬藁以附誌稿之後間嘗秉筆悲
思輒止今已四年矣自來江戶百事一變俯
仰感愴意不能已偶得舊稿於篋中與一二
近臣之經殊遇者同讀之悼英魂之不返憂
遺緒之或墮遂相嗟嘆而刪定之者如此斯

蓋將以補墓誌所不載表盛德之万一諷曉
今之在上君子而因以致犬馬愚臣啣恩荷
寵而不得隨從地下之憾使後世傳之尚有
足以想見當日者矣而臣之身賤德劣其言
無以取重於世敢望其必傳乎唯公之遺
澤在人者雖歷百世而不氓耳嗚呼痛哉
嘉永二年己酉四月

臣村上量弘識

先公之薨也量弘奉令作誌又追作擬銘事
皆如其跋所云量弘既作此銘使予討論之

予受而一閱之多事卒々未及加至庚戌六
月量弘發狂犯罪自屠而死予亦連坐幽囚
九閱月始得釋歸屏居無事乃出而覽之百
感交集不能復讀嗚呼予與量弘同事先
公嘗忝特達之知承非常之遇恩眷優渥如
左右手大故以來隨事感傷相共追想當日
論思之狀笑語之態宛然在目未嘗不執手
相泣也今也吾二臣者愚妄觸禍量弘死而
予獨存于世回顧疇昔愧懼哀悼更有難懷
者矣量弘已獲罪於國家以死此銘若不宜

傳者焉雖然先公之德之業贊述周詳非
量弘孰能至此且其所作墓誌已從公于
九泉而此銘之作亦在護罪之前則錄而傳
之未見其不可也乃為校定一過報量弘生
前之託而附載于此因叙其顛末以識今昔
之感

嘉永四年辛亥三月 野崎教景識

義源公遺髮塔記

維弘化三年秋七月三日筑後國久留米城主從

四位下侍從 有馬筑後守源朝臣賴永公薨於
國城厥九月二十二日葬於久留米梅林寺之先
兆茲又藏遺髮於江戶澁谷祥雲寺 靈源公墓
側建塔識之 大慈公遺髮塔在北 公塔在南
公與 大慈公夾 靈源公墓而立蓋 公遺意
云 公聰明仁厚有志中興之業其行事政績既
詳於墓誌故不復記
弘化三丙午冬十有一月 日建
野崎教景謹撰
今公之為 公子也嘗從 先公謁祥雲寺 靈

源公墓 先公指 大慈公遺髮塔示 公子曰
予而死遺髮之藏願得做此塔 公子以為一時
之戲不甚措意居三年 先公薨 今公立 先
公遺髮適至自國 今公乃追憶前日墓前之託
哀感殊甚遂命諸有司遺髮塔之制尺度方位皆
以 大慈公塔為則嗚呼 先公以鼎盛之齡承
國家之重方將振勵奮發以為 祖先刷宿弊為
志而遽有此託者何也豈其以多病弱質自知其
壽之不得長歟抑邱墓之間悽愴之餘偶然生於
心而發於口者遂為蘭折玉摧之兆也天道是邪



非邪悲夫

臣 教景垂泣私跋

